

第五高等学校における軍事教練・査閲

「戦中・戦後の第五高等学校に関する調査」報告

熊本大学五高記念館

薄田千穂

# 第五高等学校における軍事教練・査閲

## 「戦中・戦後の第五高等学校に関する調査」報告

熊本大学五高記念館 薄田千穂

### 目次

一、序言	1
二、調査概要	
(一) 名称	2
(二) 目的	2
(三) 方法	2
(四) 調査の時期	2
(五) 調査対象	2
(六) 調査書配布・収集の方法	2
(七) 調査書	2
三、調査結果	10
(一) 回収状況	10
(二) 回答状況	12
1、軍事教練	12
①内容	
②五高生の態度	
③教官の印象、教官との関係	

2、査閲 ——— 20

①内容 ②査閲の印象・五高生の態度

3、昭和一八年査閲事件 ——— 24

①経緯 ②教職員の対応 ③生徒の対応 ④感想

4、五高と戦争 ——— 33

①戦争の情報 ②生徒間の情報交換 ③五高と軍隊の関わり

四、聞き取り 有田哲哉(昭和一八年文乙卒業) ——— 39

五、座談会 五高十八年会 ——— 43

六、史料 ——— 57

(一) 年表 ——— 57

(二) 学科課程・教授時数表 ——— 60

(三) 軍用書所持教員一覧 ——— 63

(四) 配属将校一覧 ——— 70

七、考察 ——— 71

## 一、序言

昭和一八（一九四三）年、第五高等学校（以下、五高と称する）で、熊本師団兵務部長山口信一少将の講演が行われた。この時、山口少将の講演内容に抗議した生徒が哄笑、下駄を鳴らすなどし、講演は中断した。その後山口少将は軍事教練の査閲官として来校したが、そのときの査閲が不合格になるという事態が起った。このため配属将校は転属させられ、二か月間配属将校の席が空席となった。五高に関する文献では、事件として捉えられ（以下、査閲事件と称する）、その後の五高や卒業生の動向に影響を及ぼしたことが記されている。

昭和六（一九三一）年の柳条湖事件にはじまる戦争は、高等学校にも大きな影響を及ぼした。昭和一二（一九三七）年国民精神総動員実施要項が閣議決定され、これに基づき国民精神総動員運動が展開された。高等学校では、長髪・飲酒・運動会・記念祭等が規制・禁止されることとなった。五高では昭和一四年断髪令が言い渡され、昭和一五（一九四〇）年一月一二日に生徒の自治組織であった校友会「龍南会」が「龍南学徒報国団」と改組され、習学寮とともに学校の直接監督下に置かれた。太平洋戦争の戦況が逼迫する昭和一七（一九四二）年には修業年限が二年半に、さらに昭和一八年入学の学年は二年に短縮された。昭和一八年一〇月には法文系学生の学徒出陣が行われ、五高からも昭和二〇年七月までに二三人が出陣した。

このような時期に起った査閲事件は、五高の自治の伝統と軍事体制

の相克が生み出したものであり、戦時中の五高を象徴するものと考えられる。

本報告書は、第五高等学校における軍事教練・査閲の実態と、昭和一八年に行われた査閲の詳細、当時の五高生の意識などの情報をまとめ、戦時の五高の一端を明らかにしようと試みるものである。

このテーマを研究するにあたって、当事者の卒業生にアンケート調査や聞き取り調査を実施した。アンケート調査にあたっては、調査内容を拡大し、「戦前・戦後の第五高等学校に関する調査」と称して、戦後の五高在学学生を含むすべての卒業生に調査を行った。調査書送付一九五八通に対して、二月二八日現在の回答数は二割に近い三五五通にのぼる。中には家族が本人から聞き取っていた記憶による記入もあり、卒業生の五高生活についての印象の深さを実感することが出来た。ご協力いただいた卒業生やゆかりの方々には心から感謝したい。

なお、本報告書は、平成二一年度日本学術振興会科学研究費補助金奨励研究「旧制高等学校と軍隊との関わりに関する研究」（21906028）により作成した。

## 二、調査概要

### (一) 名称

戦中・戦後の第五高等学校に関する調査

### (二) 目的

昭和初期～昭和25年の五高について、当時の学校内の様子、五高生の意識などの情報を収集して研究資料としてまとめ、旧制高等学校の研究に資することを目的とする。

### (三) 方法

『五高同窓会会員名簿 百周年記念号』『東京五高会名簿』などをもとにして卒業生へ調査書を郵送し、返送された調査書の内容をデータ化する。

### (四) 調査の時期

発送 平成21年10月10日付

返送期限 平成22年2月28日

### (五) 調査対象

五高卒業生（詳細は調査結果の回収状況の表を参照）

### (六) 調査書配布・収集の方法

配布 クロネコメール便

回収 料金受取人払郵便

### (七) 調査書

調査書ひな型はつぎのとおり

## 戦中・戦後の第五高等学校についての調査書

I 経歴編	2～3頁
II アンケート編	4～14頁
III 証言・手記編	15～16頁

の3編で構成しています。  
質問によっては二重になるところもありますが、どうかご容赦ください。

### II アンケート編について

1、戦中・戦後の五高での生活について（すべての方にお聞きします。） 4～8頁

### 2、戦時中の五高について

（戦時中に五高に在学されていた方や体験を聞かれた方にお聞きします。） 9～12頁

3、戦時中の体験（すべての方にお聞きします。） 13頁

4、五高、五高生についての資料について（すべての方にお聞きします。） 14頁

ご記入いただけるかどうかはわかりません。また、先生や先輩・後輩からお聞きになったこととお書きいただく場合はその方のお名前や卒業年をご記入ください。できるだけ多くの情報を集めたいと思います。

### III 証言・手記編について

激動の時代、戦中・戦後を体験された五高卒業生の証言・手記をお書きください。

アンケートに記載した質問事項は手記を書かれる際のヒント、あるいはキーワードとして御参照ください。

ご記入いただいた内容は五高及び五高生についての研究にのみ使用し、個人情報は充分配慮いたします。

2009年 月 日記入

I 経歴編

I-1、五高入学前 (中学校・関係者の学校・兵役等)

---



---



---



---

I-2、五高在学中

- ・入学年月・クラス

---

- ・卒業年月・クラス

---

- ・習字塾入塾の期間

---

- ・所属した部活動

---

- ・五高での役職 (家徳代、龍崎会役員等)

---

- ・学従動員に行きましたか      はい      い いいえ

---

- 郵員先

---

- 期間

---

- ・学従出陣をしましたか      はい      い いいえ

---

- 入隊月日

---

- 配属先                              階級

---

- 引き掛け年月日

---

- 五高に復学しましたか      はい (      年      月 )      い いいえ

I-3、五高卒業後

・進学先

入学年・学部	卒業年・学部	
・学従出陣をしましたか	はい	い いいえ
入隊月日	配属先	階級
引き掛け年月日		
大学に復学しましたか	はい (      年      月 )	い いいえ
・兵役の経験 ( 志願 召集令状 )		

以下は、ご記入いただける方にお願ひします。なお、個人情報の取扱ひには充分配慮します。

- ・その後の経歴 (就職先等)

---



---



---



---



---



---

氏名 \_\_\_\_\_

住所 〒 \_\_\_\_\_

連絡先 (電話・Fax・Eメール等) \_\_\_\_\_

## II アンケート編

II-1、五高での生活についてお答えください。(すべての方にお聞きします。)

### II-1-1、勉学について

#### ① 入学試験

○ 入学試験はありましたか、

あった                      なかった

○ 入学試験の年月日、場所はどこでしたか

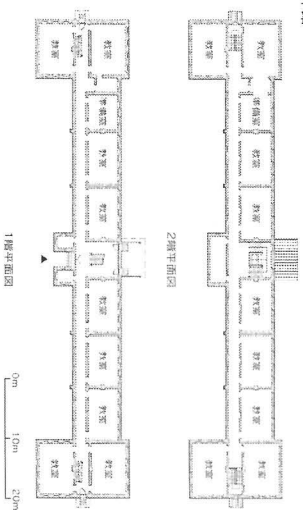
○ どんな試験科目がありましたか。どのような内容でしたか。

○ 試験の倍率はどのくらいでしたか。

#### ② 授業について

○ おもに使われていた教室はどこでしたか。(○をつけてください)

・ 本館



・ 新教室 ( 1F・2F ) ・その他 ( )

○ 心に残る教授・授業

○ 教科書、教材で記憶に残っているもの

#### ③ 学科試験について

○ どんな問題が出ましたか。(教科・問題)

○ 成績で、赤丸・黒丸などと呼ばれていたのはどんなことですか。

○ 試験の採点はきびしかったですか。

はい                      いいえ

点数が足りなかった時の対応 (具体的な事例)

#### ④ 進学について

○ 進学先を決めた理由・時期

○ 入学試験はありましたか

・ あった

日時・場所

試験科目・内容・倍率

・ なかった

選抜方法

## II-1-2. 寮の生活について

① いつからいつまで入寮していましたか

② 日課 (起床時間、食事時間、就寝時間、勉強時間等)

③ 習学運営組織について

○ 役員をしていましたか (他代、炊事委員、組長等)

・ していた ( ) していない

○ 上記の職務はどんなことでしたか

○ ほかにどんな役割がありましたか

④ 部屋割について

○ 寮の部屋は1棟に何室ありましたか

○ どのような基準で部屋割がされていましたか (同部屋の人数・学年・クラス)

⑤ 食事について

○ 献立

・ 通常の献立

・ 祭事の献立

○ 食糧調達のエピソード (買出し、畑開墾等)

⑥ 阿蘇道場について

○ 阿蘇道場に行ったことはありますか

ある ない

○ どのような活動・日程でしたか

○ どのようなメンバーで行きましたか

⑦ 行事について

○ 阿蘇山登山、川下り等の行事はありましたか

あった (内容) なかった

・ どの季節でしたか

・ どんな日程でしたか (現地までの移動手段、持参したもの、かかった時間等)

○ ストームをしましたか

あった なかった

・ 月にどのくらいしましたか

・ どのようなきっかけで始り、どのようなきっかけで終わりましたか

⑧ アルバイトについて

○ アルバイトをしたことがありますか

ある(目的) ない



○ どんなアルバイトで、報酬はどのくらいでしたか。

II-1-3、龍南会（龍高生徒報団）について

① 龍南会の役員をしていましたか。

はい（役職 \_\_\_\_\_） いいえ \_\_\_\_\_

② 上記の職務はどのようなことでしたか。

③ 所属していた部活動は可ですか。

部の構成（人数・学年・クラス）

④ 活動場所・内容について

⑤ 対外試合・遠征について（行先、試合相手、宿泊場所、経費）

II-1-4、龍南会雑誌について

① 昭和16年～19年の雑誌部委員の名前

② 雑誌部は委員のほかにも部員はいましたか。何人で編集していましたか。

③ 編集の苦労などありましたら

II-2、戦時中の五高についてお答えください。

（戦時中に五高に在学されていた方や体験を聞かれた方にお聞きします。）

II-2-1、軍事教練について

① 週に何時間（何回）ありましたか

② 担当していた教官とその印象

③ どんな内容でしたか。五高生の態度はどうでしたか。

II-2-2、査問について

① 時期・場所

1年に（ \_\_\_\_\_）回 \_\_\_\_\_ 月ころ \_\_\_\_\_ 場所

② 来校した人物は誰でしたか（階級、名前）

③ 内容（式次第等）

④ 査問に対してどのような印象を持っていましたか。五高生の態度はどうでしたか。

II-2-3、昭和18年に配属中学校引き上げられる発端となった査問事件について

① どのような事件でしたか。

② 当事者（査問官・将校・生徒）の氏名

③ 校長・教授の反応

④ 生徒たちの反応

⑤ 査問事件に際して思ったこと

#### II-2-4、勤労動員について

① 勤労動員に行きましたか

はい いいえ

② 動員された期間・場所

③ 五高生以外にどんな学校の人がいきましたか

④ 仕事の内容

⑤ 動員先での生活

日課

食事内容

#### II-2-5、終戦直前に五高内に機材が設置され、工場となったことについて

① 置かれていた機材・場所

② つくられていたもの

③ 作業のために外部の人は来ましたか

④ 五高生はどのような作業をしましたか

⑤ 空襲警報が出た時の対応

#### II-2-6、学徒出陣について

① 第1回出征会の日時、場所、内容

② その後出征会はありませんでしたか。日時、場所、内容

③ 出陣した方々の消息は五高に伝わりましたか

④ 卒業生(帝大他)の出陣についてのエピソードなどありましたら

## II-2-7、1945年8月15日の五高の様子について

### ① 生徒の反応

.....

### ② 教授の話、反応

.....

### ③ 五高内の雰囲気

.....

## II-2-8、戦争について

### ① 当時、五高内に新聞・ラジオ以外で戦争の情報は入りましたか

.....

### ② 生徒間で戦争の話はできましたか、どのような話をしましたか。

.....

### ③ 地域の軍隊（六期団、大江地区軍用留の部隊など）と交流がありましたか。

.....

### ④ 五高において、戦争の影響はどのようなところであらわれたと思いますか。

.....

.....

.....

## II-3、戦争の体験について（オマケの方にお聞きします。）

（五高以外での戦争体験について、（例）帝国大学・軍隊・尋常中学校など）

### ① 当時の年齢、所属

.....

### ② 体験した場所

.....

### ③ 内容

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....



### 三、調査結果

#### (一) 回収状況

本報告書でとりあげる配布・回収結果については、軍事教練・査閲の経験があるという観点から、昭和23年までの卒業生を対象とした。クラス番号等が不明のものは区分を「文」もしくは「理」とした。

回収状況 (2010. 2. 28現在)

卒業年	クラス	配布	小計	回収	小計		
大正14年	理甲1	1	2				
	理乙	1					
大正15年	文甲3	1	1				
	理甲2	1	1				
昭和2年	理乙	1	1				
昭和3年	文甲2	2	2				
	理甲3	1	1				
昭和5年	文甲3	2	2				
	理甲1	1	1				
昭和6年	文甲2	1	3				
	文甲3	1					
	文乙	1					
	理甲3	3	3				
昭和7年	文甲1	1	2				
	文甲2	1					
	理甲1	1	3				
	理甲3	1					
	理	1					
昭和8年	文甲1	1	3				
	文甲2	1					
	文乙	1					
昭和9年	文甲3	4	5				
	文乙	1					
	理甲3	1	3				
	理乙	1					
	理	1					
昭和10年	文甲1	3	12				
	文甲2	3					
	文甲3	4					
	文乙	2					
	理甲1	2	7				2
	理甲2	1					
	理甲3	2				2	1
	理乙	2					
昭和11年	文甲1	2	4				
	文甲3	1					
	文乙	1					
	理甲1	2	8			1	1
	理甲2	2					
	理甲3	3					
理	1						
昭和12年	文甲1	3	9				
	文甲2	4					
	文甲3	2					
	理甲1	2	8				
	理甲2	1					
	理甲3	3					
	理乙	1					
	理	1					
昭和13年	文甲2	2	8	1	2		
	文甲3	4		1			
	文乙	2					

昭和18年	理甲 2	18		4	
	理甲 3	21		5	
	理乙	15			
昭和19年	文 1	21	73	6	16
	文 2	18		4	
	文 3	19		3	
	文 4	13		3	
	文	2			
	理 1	19	101	3	13
	理 2	21		2	
	理 3	19		2	
	理 4	14		1	
	理 5	14		1	
	理 6	14		4	
昭和20年	文 1	25	95	3	15
	文 2	23		6	
	文 3	22		4	
	文 4	25		2	
	理 1	29	142	5	33
	理 2	22		5	
	理 3	22		2	
	理 4	30		7	
	理 5	19		7	
	理 6	19		7	
	理	1			
昭和22年	文イ	6	48	2	8
	文ロ	8		1	
	文 2	16		2	
	文 3	2		1	
	文 4	5			
	文	11		2	
	理 1	24	192	7	28
	理 2	21		2	
	理 3	19		1	
	理 4	33		2	
	理 5	32		5	
理 6	27		4		
理 7	16		2		
理 8	19		4		
理	1		1		
昭和23年	文甲	51	66	9	9
	文乙	15			
	理 1	24	162	4	33
	理 2	14		3	
	理 3	19		5	
	理 4	20		1	
	理 5	23		4	
	理 6	10		3	
	理 7	25		2	
	理 8	17		6	
	理 9	10		4	
理甲			1		
計		1,503	1,503	224	224

昭和13年	理甲 2	3	9		
	理甲 3	2			
	理乙	1			
	理	3			
昭和14年	文甲 1	6	11	2	4
	文甲 2	1		1	
	文甲 3	1		1	
	文乙	3			
	理甲 1	4	10		1
昭和15年	理甲 2	3			
	理甲 3	2		1	
	理乙	1			
	文甲 1	7	14	1	3
	文甲 2	3		1	
昭和16年	文乙	4		1	
	理甲 1	1	10		
	理甲 2	7			
	理甲 3	1			
	理乙	1			
昭和17年 3月	文甲 1	10	41		5
	文甲 2	9		3	
	文甲 3	8			
	文乙	10		2	
	文	4			
	理甲 1	14	52	2	6
昭和17年 9月	理甲 2	12		1	
	理甲 3	9		1	
	理乙	15		2	
	理	2			
	文甲 1	14	54	1	5
	文甲 2	9			
昭和18年	文甲 3	17		2	
	文乙	12		1	
	文	2		1	
	理甲 1	16	72	3	4
	理甲 2	16		1	
	理甲 3	20			
昭和18年 9月	理乙	17			
	理	3			
	文甲 1	17	66		6
	文甲 2	21		4	
	文甲 3	15			
	文乙	12		2	
昭和18年	文	1			
	理甲 1	11	72	1	10
	理甲 2	19		3	
	理甲 3	22		3	
	理乙	20		3	
	文甲 1	16	58	2	9
昭和18年	文甲 2	14		3	
	文甲 3	19		3	
	文甲			1	
	文乙	9			
	理甲 1	12	66	2	11

## (二) 回答状況

本項には『戦中・戦後の第五高等学校についての調査書』に記入された回答を掲載する。回答は内容ごとにまとめ、卒業年代順に並べた。文末には回答者の卒業年度とクラスを記載した。なお、昭和二四年以降の卒業で該当年度に在学の場合は、回収状況の数には表記していないが、回答を掲載したものもある。

### 1、軍事教練

#### ① 内容等

昭和一七年三月卒業（以下、卒業を略する）

・銃をかついでの行進行軍、射撃訓練、実習、実弾射撃（昭17・3文甲1）

昭和一七年九月

・整列、銃の操作、行進、夜間訓練、演習、小生にとっては苦痛ではなかった。（昭17・9文甲2）

・一般歩兵の教練、行事演習（昭17・9理甲2）

・中学校の軍事教練より厳しくなかった。（昭17・9理甲3）

昭和一八年

・型どおりの教練であった。特に負担は感じなかった。（昭18文甲2）

・極めてカンタンな教練で当方も気楽にやっていた。（昭18文甲2）  
・厳しい訓練ではなかった。一回位は銃剣道をやらされたか？割とごやかな感じ、反動的な考えを持つものもなかった。（昭18文甲）

昭和一九年

・小銃小隊（軽機関銃含む）による戦闘訓練まで（査閲時にそれが対象だったから）（昭19文1）

・中学時代より厳しくなかった。学生は適当にやっていた。戦争に役に立つ訓練は全くなし。（昭19文1）

・戦時中第六師団团长来校、五高生の戦時意識がないと説教され学生は抗議やブーイングだった。（昭19文1）

・記憶する程のことはない、型だけ（昭19文4）

・ある時、講演に来られた方が教練の重要性につき、懇々と諭され、我が方の兵力と敵方の兵力を比べると（〇…一〇〇）であるといわれたので、比率としてはこの例えはおかしいということで、一部の学生が笑い出して、講演した教官が憤激して、それ以来五高生の評判が悪くなったときいている。（昭19理2）

・生徒の態度は体育と同様。年一回の校外での実弾射撃など、授業内容は中学校と大きい相違がなかったが、折に触れ、実戦経験がある先生達が語る戦場の実情やその複雑な心情には大きい影響を受けた。（昭19理3）

・中学時代の教練と同じ延長線上にあった。学生も真面目に取り組んで

いた。余り無理なことは強行された憶えはない。(昭19理3)

・野外演習と称して人目につかない野原に引率し、ストーム(武夫原ダンス)をやらせてくれた教官もいた。(旧制中学の軍事教練に比べると、ずい分楽でのんびりしたものだった)(昭19理6)

・教練時間は旧制中学の時より少なくなり、生徒は比較的行ラックスした気持で、しかし皆真面目であった。(昭19理6)

昭和二〇年

・歩兵訓練、行事、クラス別に分けての攻撃演習、分列行進など(昭20文2)

・練兵場でグライダー練習で教練免除(昭20理3)

・武夫原での行進、突撃など(昭20理4)

・手りゅう弾投げ等、ゲーム感覚(昭20理4)

・ノンビリしていた。三八式銃をかついで竜田山へのぼりおり。姫小

松の林の中で、着弾キヨリの計算など(昭20理4)

・野外教練が記憶にある位、一寸遠足に近い。(昭20理5)

・「おいちにおいちに」の行軍と竜田山からの市内の地形観察等(昭20理6)

・中学のほうがもつとしごかれた。徹夜の夜間行軍も四年生の初め完走したし運動部(バスケット)では血の小便が出た。それに比べると時間数も少なく、週一回か二回ではなかったか。割とのんびりしていたように思う。(昭20理6)

昭和二二年

・徒歩従軍と接戦実習、銃剣で刺殺と取っ組み合い格闘(昭22文2)

・大連の中学時代に較べて特に戦時色はなかった。昭和二〇年四月以降終戦迄は、殆ど学業なし。(昭22理1)

・歩行訓練、行軍、銃の操作、銃剣道訓練(昭22理2)

・銃を持って教練を受け、平穩であった。(昭22理4)

・銃を持って射撃訓練が多かった。立ち射ち、座射ち、寝射ちなど。

分列行進は査閲の時だけ(昭22理5)

・不動の姿勢など基本から「突け！」など銃剣術(昭22理5)

・銃剣術にかなりの時間が使われた以外、内容については覚えていない。中学時代と違って手榴弾投げや匍匐前進で苦しんだ覚えはなく、野外教練もなかった。教練三時間の時は、配属将校は一時間半で解放してくれたと思う。五高生もくつろいでいて、ハリキって軍人の動作や態度を真似る馬鹿はいなかった。(昭22理7)

② 五高生の態度

昭和一六年

・剣道と銃剣術が強かったのでやさしかった。長髪にしていた者は「髪を伸ばすな」と怒られ「伸ばしたんではなか、伸びたっちゃが」と答えたりしていた。(昭16文甲2)

・授業の際には皆真面目(昭16文甲2)

・当時の中学生に比べてややだらけていました。(昭16理甲1)



・中学校と大差はなかった。皆真面目な態度であった。(昭16理乙)

昭和一七年三月

・例外もあつたが、一般的に素直であつた。(昭17・3文甲3)

昭和一七年九月

・厳しく上から押さえつけるような圧力はなかったが、それなりに真面目に教練に参加していたと思う。(昭17・9文甲2)

・まじめではなかった。(昭17・9文乙)

・一、二年はまだ平和な時代の余韻が残っていた。三年になって半年卒業が早くなつて一挙に戦争を感じるようになった。従つて軍事教練は中学時代より楽だった。査閲にはクツがなくて足に黒く墨を塗つて出た事があつた。(昭17・9理甲2)

・熱心ではなかった、しかし教練を合格しないと兵役で二等兵で入隊しなければならぬので、無視はできないことになつていた。(昭17・9理甲3)

・隊伍を整え行進から銃操作など。五高生にはゲートル、靴なく借物で対応したりした。かなり自由であり教官も大目、寛大だったと記憶している。(昭17・9理甲3)

・まじめ(昭17・9理甲乙)

昭和一八年

・下駄はいて、ゲートルまいて出席した豪傑もいた。私たちの頃はま

だまだ余裕のある人間味のある教練だった。それにつきる。査閲についても同じ。(昭18文甲2)

・極めてカンタンな教練で当方も気楽にやっていたが、教官の手柄がよかつたので割と楽しかつた思い出がある。(昭18文甲2)

・ゲートルは巻いていたが、靴を履かず下駄ないし裸足の者もいた。

(昭18文甲3)

・余り気乗りはしないが仕方なしにやっていた。(昭18理甲1)

・自由で厳しくなかつた。下駄ばき、ゲートルなしの生徒もいた。

(昭18理甲2)

・半分真面目、半分遊び、右向け右、中にゃ左向くオハラハーバカも居る”(昭18理甲2)

・自由で厳しくなかつた。下駄履き、ゲートルなしの生徒もいた。

(昭18理甲2)

・真面目にやっていた記憶がある。(昭18理甲3)

・戦時中でもあり、五高生も真面目に努力したと思います。(昭18理甲3)

・皆まじめにやりました。(昭18理甲3)

昭和一九年

・不真面目(昭19文1)

・なかなか厳しかった、学生はまじめ、当初、靴を忘れてハダシでやつた人もいた。(昭19文1)

- あまり真剣にやらなかった。(昭19文2)
- 前者(教練)には真面目に対し、後者(教官)には仲良くやりました。(昭19文3)
- 今から考えるとずいぶんだらけた調子でした。(昭19文3)
- 銃剣道、一応真面目にやった。(昭19理1)
- 行進、真面目(昭19理1)
- あまり熱心ではなかった。九州全体査閲で一番悪かったので教官が査閲官に厳しく叱責された。(昭19理4)

## 昭和二〇年

- 割と真面目(将来幹部候補生として)(昭20文1)
- 反軍の思想行動が目立ったので、時節柄軍部からにらまれていた。(昭20文1)
- 無視していた。(昭20文2)
- 一般に冷笑的、非協力的(私個人としては出陣した友もあり、そのような他人事的態度を遺憾に思っていた。)(昭20文2)
- お義理に教授をやっている感じで中学時代に比べて教官はやさしかった。我々はそれをよいことに緊張していなかった。(昭20文3)
- まじめでもふまじめでもなかったが、帯山で兵隊も混えた観兵式の演習があるとかで出掛けた時は、下駄ばきなども居て、深草さんも諦めたらしく、空しく帰ったことがあった。(昭20文4)
- 記憶に薄い、ただ中学時代と同じだったと思う、余り従順ではな

かった。(昭20理1)

- 昭和一七年頃はゲタを脱いでハダシでゲートル無しで行進していても、何も言われなかった。昭和一八〜一九年は靴とゲートルを付けなければならなかった。昭和一七年頃は軍事教練を馬鹿にしていたが、昭和一八〜一九年は形だけはらしくやっていた。(昭20理2)
- 中学校時代の記憶は鮮明にあるが、五高時代のそれは全くないので、多分とてもルーズなものだったのではないかと思う。(昭20理2)
- 余り気乗りしない教練でした。(昭20理2)
- 服装はまちまちであったような記憶あり。(昭20理4)
- しかし熊本は精強六師台の地であるが、とかく単細胞的軍人の独尊的言動には五高生は伝統的に反撥し昔から有名な偶発事件が伝えられて、内心快哉を感じる所あって、深草さんは別格として軍人一般を揶揄する気持があつた事は否めない。(昭20理6)
- のんびりしていたようです。(昭20理6)
- 余り熱心でなく適当にやっていた。足部に墨を塗りゲートルの代わりに紐でズボンの二箇所を結んでいた。教官が「靴は？」と言えば「配給してください」といいそのままだった。(昭20理6)
- 小供の戦争ゴッコ感があつた 中学校の方が余程楽しい。(昭20理6)
- 適当。例えば寝打ちには横になるだけ、行進の歩調もバラバラ。二組に分かれ遭遇戦。中学に比べて大変楽な時間(昭20理6)

## 昭和二三年

- まじめにやった。(昭22文イ)
- 銃剣術、ほふく前進等、皆のんびりやっていた。(昭22文)
- 中学時代較べ、厳しいものでなかった。(昭22理1)
- 軍事教練、真面目だった。(昭22理1)
- 行進が多かったように思う。五高生の態度は普段と変わらなかった。(昭22理1)
- 行進の仕方、銃の使い方、態度は普通で協力でも反抗でもない。靴がないため裸足に墨を塗っていたこともある。(昭22理1)
- とても素直な態度であった。中学時代は絞られて教育を受けたので五高でも変わらない。(昭22理2)
- 軍人に対する好意を持っていなかったで態度はよくなかった。(昭23理3)
- 草履を履いていて厳しく叱られたものがあった。(昭22理4)
- よく覚えていませんが、余り熱心ではなかったようです。(昭22理8)
- 主として銃剣術。五高生はゲートル巻き、裸足か地下足袋でだらだらと行動した。帽子から長髪が食み出て居る者には、どうして散髪しないかと注意されたが、床屋へ行く金がないと応えると、「しよやがないナー」と言って、教官が財布から何分か出して「これで床屋へ行って来なさい。」人情味のある人だった。(昭22理)

## 昭和二三年

- 基本動作、真面目にやっていたと思う。(昭23理1)
- 中学時代に比べると極めて不真面目で下駄を履いて出席するものも居たが陸軍大佐は別に咎めなかった。駆け足の時は下駄を脱いで手に持って走るものも居た。(昭23理2)
- 小隊毎の分列行進、生徒の態度は特に目立ったものは無く普通だった。(昭23理1)
- 教授については全く無関心であった。五高生は凡ね軍事教練にはある種の反感を持っていたと思われる。終戦直前、受けた記憶あり。(昭23理2)
- 忘れた、中学の教練は覚えているが五高の教練は全く記憶にない。(昭23理3)
- 昭和二〇年七月入学し終戦までに武夫原で二回ほど軍事訓練があった。整列、行進ぐらいだったが「なんてへたくそなんだろう」と思ったものだ。陸軍大佐殿が話をしてくれたが、別に威張っててもいなかった。(昭23理3)
- 一応真面目に命令に従っていた。中学校の時より手ぬるい感じだった。(昭23理5)
- 「ぞうり」をはいての行進で中学時代とは全く違うので面くらいました。(昭23理9)
- 旧制中学生にくらべて、大分ダラけていた。(昭23理9)
- 厳しさなどは殆んど感ぜず、割とのんびりしたもの(昭23理9)

昭和二四年

- 熱心でしたね。(昭24文甲)
- 教官は始めは、かなりはりきっていたが、動作のニブイ「五高生」タイプにあきらめ、雑で、かなり「テキトウ」だった。(昭24理甲)

③ 教官の印象、教官との関係

昭和一五年

- 好印象(昭15文甲1)

昭和一六年

- 紳士的(昭16文甲2)
- 友人みたい、暴力沙汰なし。(昭16文甲2)
- 配属将校深草大佐、教練永田中佐、古閑中佐、龍造寺少佐 穏やかな人たちであった。(昭16理乙)

昭和一七年三月

- 堅い軍人ではなく、大事に扱ってくれた。(昭17・3文甲3)
- 龍造寺、あまり尊敬されていなかった。(昭17・3文甲3)
- 深草大佐、五高生に理解を示す(昭17・3理甲1)
- 龍造寺少佐、大和魂の権化(昭17・3理甲1)
- あまり厳格ではなかった。(昭17・3理甲2)

昭和一七年九月

- きわめて紳士的、中学校の配属将校と対照的。(昭17・9文甲2)
- おだやかな感じで無理な指導は受けなかった。(昭17・9文甲2)
- 私の直接関与した限りでは、生徒も紳士的で教官との間でトラブルは無かった。(昭17・9文甲2)
- 私の中学は特に訓練に力を入れていた関係で生徒にはかなり厳しい対応があったが、これに反し五高ではずっと緩やかで軍人も五高生には一措しているのかなと思う程であった。(昭17・9文甲2)
- 高校生に対し理解のある方に対応する生徒も先づ先づだったと思う。(昭17・9文乙)

昭和一八年

- きびしくなかった。(昭17・9文乙)
- 深草大佐、立派な方(昭17・9理甲3)
- 割と温和な人であった。(昭17・9理乙)
- 温厚な人柄にみえた。(昭18文甲2)
- 深草大佐と某中尉、二人とも相当な年令で、人柄は実によかった。非常に学生に理解があった。(昭18文甲2)
- 五高の教官らしい軍人でした。(昭18文甲3)
- 五高生向き配属将校だったと思う。(昭18文甲3)
- 教官は退役の大佐クラスでかなりのお年寄りだったと思う。(昭18文甲)

- ・非常に五高生に理解のある退職軍人だったので陸軍省から睨まれていた。五高生は親しみを持っていた。(昭18理甲1)
- ・配属将校深草大佐は非常に理解のある人で時代を正しく見ていた方。(昭18理甲1)
- ・真面目で努力型の教官でした。(昭18理甲3)
- ・退役大佐の方と下士官の方の二名、特に大佐の方はなかなか立派な方でした。(昭18理甲3)

#### 昭和一九年

- ・深草大佐(予備役)、温厚篤実の人(昭19文1)
- ・温厚な人柄で皆に好かれていた。(昭19文2)
- ・広田少尉、ノモンハン帰りの、わりとのんびりした好感のもてる軍人だった。(昭19文2)
- ・いい教官だったと思う。(昭19文3) (昭19理1)
- ・それほどきびしいとは思いませんでした。(昭19文3) (昭19理4) (昭19理6)
- ・きびしいとは思わなかった。配属将校の深草大佐は五高生を愛し、五高生は道の真中を闊歩せよと言われた。(昭19文3)
- ・深草大佐、非常に暗い感じの人(昭19文4)
- ・別に強制する態度なし、好感が持てた。(昭19理1)
- ・寛大な軍人であったと思う。(昭19理1)
- ・こわそうで優しいところのある先生(昭19理1)

- ・厳しかったと思う。(昭19理2)
- ・名前は思い出せない。学生に思いやりがあった。(昭19理3)
- ・配属将校二名、学校所属の軍人教師三名の授業を経験したが、何れも生徒に敬愛されていた。(昭19理3)
- ・ノモンハン帰りという中年の穏やかな少将(名前不詳)(昭19理5)
- ・五高生にはかなり遠慮してあまり強圧的な人はいなかった。(昭19理6)

#### 昭和二〇年

- ・軍人というより仲間という意識が強く教官も押しつけがましくなかった。そうなると司令部より交替させられていたが、どんな教官も生徒の方に同化されてしまっていたようです。下駄履きで銃を持って訓練を受けようとする人が多かった。(昭20文3)
- ・教官がおかしなことを言うと皆笑った、声をあげて！(昭20理1)
- ・最初の教官(深草大佐)が昭和一八年査閲でくびにされてから来た教官は、野蛮な男だった。野外演習で、私は何か変わったことをしたことはないのに、いきなり馬にのったまま私に近づき馬のむちでなぐりつけた。私は抵抗心強く一步も引かなかったところ、遠くでだれかが笑ったというので、教官はそっちの方へとんでゆき、その後何ともなかった。(昭20理4)
- ・温厚(昭20文1) (昭20文2) (昭20理6)
- ・大佐一名、中尉一名、いずれも大人しい。(昭20文3)

- 最初は厳しくても途中から軟らかくなった。(昭20文3)
  - 内藤少将という銃剣術の先生がいたと思う。何と言っても印象に残るのは配属将校の深草大佐。(昭20文4)
  - 大佐、人物でしたが、熊本師団長により左遷させられた。(昭20理1)
  - 昭和一七年頃は自由を認めてくれた。昭和一八―一九年は配属将校は少しキビシかった様だ。(昭20理2)
  - 入学当時の教官は、温厚な人柄で、査閲の予行練習をしたときも「それでよい」とほめてくれたことをおぼえている。(昭20理4)
  - 配属将校の大佐、いい人でした。(昭20理4)
  - 深草大佐、軍人としては良く出来た人との印象を持った。(昭20理5)
  - 何れも五高生の気質を理解してくれていた。(昭20理6)
  - 入学当初から深草大佐が配属将校で名の如く謹直にして鷹揚で育ちの良さを思わせる人で上級生も敬愛していたようだ。少々の破目外しても笑っておられた。しかし一同訓練には反発することなく、教練の基準はきちんとこなしていた筈だ。既に当時は国家存亡の危機感が遍く理科生と云えども、遠からず銃を執って戦うことは自明の思いで教練を軽んじた者は居なかった。(昭20理6)
  - 大佐？体は小さいがきびきびして声はよく通った。(昭20理6)
- 昭和二二年
- 厳しかったが心はやさしかった(好印象)、なつかしい人、五高生は真剣でいい加減な五高生は見当たらなかった。(昭22文2)

- 入学すぐは温厚な大佐(と思う)、途中で若い中尉か大尉、陸士で、高等学校に反発(昭22文3)
- 嫌いな男だった、訓練に皆ついていけない。まだそんな時代(昭22文3)
- 人格者で個人の意志を尊重してくれた。(昭22理1)
- きびしかった、手拭いを腰にさげていてぶたれた。(昭22理1)
- 杉本大佐 温厚誠実(昭22理1)
- 教官は五高生をかなり理解していてあまり厳しくはなかった。(昭22理1)
- 力みかえって一生懸命指導しようと思っていたようだが、我々生徒の対応は大変散漫であった。(昭22理2)
- 杉本大佐、予備役なのでおとなしい人だった。(昭22理2)
- 高校生に対する理解者であったように思う。(昭22理2)
- 中佐は責任者としてだらしない五高生、しかし一向に従順でないのに業をにやして「お前はスパイか」と怒鳴っていた。それに比べて尉官はやさしかった。(昭22理5)
- 山下大尉(開けた人、軍縮時代の話など) 杉本大佐(五高生からみるとコチコチ、開けた方だったかも)(昭22理5)
- 大人しく引き気味(昭22理5)(昭22理8)
- goは心中では馬鹿にしていた。(昭22理6)
- 余りきびしくはなかった。(昭22理6)
- 退役将校で真面目にやればそれなりに評価してくれた。但し靴がな

い者、下駄、草鞋で参加した者もいた。(昭22理6)

私の竹田中学時と異なり、配属将校も五高生に相当に理解があり、厳しくはなかった。たまに配属将校になじられた生徒がいたが、私は彼ら(配属将校等)に悪感情は持たなかった。(昭22理7)

配属将校は三人で、ノモンハン帰りの少尉が居り、面白かった。(昭22理8)

・人格高潔(昭22理8)

・杉本(名前は忘れた)大佐。退役近い軍人らしく、余り威張る人ではなかった。(昭22理)

昭和二三年

・年配の教授でやさしい人だったと思う。(昭23文甲)

・真面目な方だった。(昭23理1)

・配属将校、杉本(?)大佐、此の人は軍人で無ければ人格優れた人物だと思っていた。(昭23理1)

・老人の陸軍大佐 寛大。武夫原で米軍機の銃撃を受けた時は解散退避を命じた。(昭23理2)

・割と年とったおとなしい人(昭23理9)

昭和二四年

・ご高齢の陸軍佐官(昭24理3)

2、査閲

① 内容

昭和一七年九月

・整列、銃の操作、行進、ほふく前進、突撃訓練(昭17・9文甲2)

・種々演習、行進等で教官が査閲官に叱られるのを見た。(昭17・9理甲2)

・整列、行進など(昭17・9理甲3)

昭和一八年

・軍事、時事訓話(昭18文甲3)

昭和一九年

・校長挨拶、第六師団長訓辞。文科大隊長として分列行進を指導した。(昭19文1)

・閲兵(昭19文3)(昭19理1)

・全校生徒の閲兵・分列行進の他は、クラスごとに指示される行動を行う。質問を受けることもある。(昭19理3)

・行進と閲兵(昭19理4)

・整列、行進、査閲官の訓辞(昭19理5)

・型通りの散兵攻撃戦闘訓練及び閲兵分列行進の後、査閲官による講評が行われたと記憶しています。(昭19理6)

昭和二〇年

- ・武夫原に教師、生徒全体を整理させ、閲兵分列行進をさせられた。(昭20文1)
- ・行列行進、模擬戦斗(昭20文3)
- ・行進、閲兵、他歩兵のする様なこと(昭20理2)
- ・中学校と同じ。(昭20理5)
- ・各組ごとに訓示(戦況について)を聞き分科行進を行っていたが足並みはバラバラで私語をしていた。(昭20理6)
- ・査閲、中隊行進、たまに実弾射撃(射撃場で)(昭20文2)

昭和二二年

- ・集団での行進をすませる。解散後一部の人は実技があった。(昭22理2)
- ・閲兵(校長による)(昭22理3)
- ・高森教授を先頭に、分列行進をした。号令をかけたのは理科七組の鳴海君(昭22理5)
- ・分列行進をしたこと位しか覚えていない。その時は二年生がいて、一年生はさらくであった。壇上に立って分列行進の敬礼を受けられたのは添野校長で、査閲官はその横地上で採点した。(昭22理7)

昭和二三年

- ・よく記憶していない。大学進学について質問された記憶がある。

(昭23理2)

- ・隊列行進(昭23理9)

② 査閲の印象・五高生の態度

昭和一七年九月

- ・別に反抗意識なし、みんな真面目であった。(外面的には)(昭17・9文甲2)
- ・普通の感じ(特別の緊張もなかった)(昭17・9文乙)
- ・多少反感的(昭17・9文乙)
- ・格別の感想なし(昭17・9文乙)
- ・五高生の態度は一般に忠実であったが、査閲官には不満らしかった。(昭17・9理甲2)
- ・きちんとやる気持ちが少ない。五高生は自由奔放の風があった。(昭17・9理甲3)

昭和一八年

- ・特に負担はなかった。(昭18文甲2)
- ・山口少尉に対しては余りよくない印象(昭18文甲3)
- ・まあまあ熱心にやったと思う。(昭18文甲3)
- ・初めから五高生を目の敵にしていたので学生も反発していた。(昭18理甲1)
- ・真面目に受けていた。(昭18理甲2)



・校外の行進なども全員立派に行ったにも関わらず査閲成績不可と言われ心外であった。(昭18理甲3)

#### 昭和一九年

- ・全員整然たるものがあつたが、師団長は深草教官を叱咤、我々は抗議した。深草大佐にお詫びに行くと「いいよ、いいよ」と慰めてくれた。教官は交替させられた。(昭19文1)
- ・記憶なし、緊張した記憶あり。(昭19文1)
- ・あの時局下だから違和感はなかったし、我々なりに真摯な努力はしたつもり。(昭19文1)
- ・ふだん通りのやり方だったので、査閲官から厳しく叱られ配属将校の面目丸つぶれ五高生憤激する。(昭19文1)
- ・特別にあらたまつた感じは持っていなかった。(昭19文2)
- ・すべてはつきりしないが、漠然とした軍人への反感を持っていた。(昭19文2)
- ・真面目にやりました。(昭19文3) (昭19理1)
- ・非協力(昭19文4)
- ・戦時中(日支事変以降)で、やや恒例的なものと思つた。中学時代もあつた(昭19理1)
- ・五高生は平静で、別に特別な反抗なし(昭19理1)
- ・兵力比のことで、余りに比較としておかしかつたので、皆が笑い出したので、それが不謹慎であるとして、査閲間の心証を悪くしたの

だと思われる。(昭19理2)

・(一八年は別であるが)、中学校以来毎年経験していたので特別な行事の印象はなかつた。評価が卒業生の幹部候補生採用数に影響することは知っていたが、生徒の関心はむしろ「学校の名誉」にあつたと思う。(昭19理3)

・緊張感がなくドラドラしていた。(昭19理4)

・これも旧制中学の時から恒例であり、戦時下に突然の行事として格別の意識はなく皆真面目に対応していたと思う。(昭19理6)

・勉強中の生徒にこんなことをしてもあまり意味がないと思つていた人が多かつた。旧制中学等の査閲に比べるとそれ程真剣さは無かつた。(昭19理6)

#### 昭和二〇年

- ・反軍思想が目立つので、ということで第一六連隊の山口少将から睨まれていた。(昭20文1)
- ・中学よりやっていたのが当たり前であつた。(昭20文1)
- ・無視していた、大変不真面目な態度だつた。(昭20文2)
- ・査閲官が傲慢なので憤慨した。(昭20文2)
- ・査閲官を馬鹿にして笑い倒した。(昭20文3)
- ・員数合わせにやっていたように全くしらけていた。(昭20文3)
- ・特に無い、冷やかな感じ。(昭20文3)
- ・中学時代に比べると問題にならない程まじめでないが、最後の閲兵

式は、一人一人の自覚が違う故か、中学生が及ばない程齷然としていた。(昭20文4)

• 中学時代の査閲と余り変わらないという印象(昭20理1)

• 立派な態度(昭20理1)

• 査閲官がイライラするのを内心、楽しんでた。形だけは…、専任教官が気の毒なので、形だけはまともにやっていた。専任教官が査閲官から、ひどく叱られた由…うわさあり…(昭20理2)

• 普通(昭20理2)

• 不愉快、反抗的(昭20理4)

• 皆真面目だった。(昭20理5)

• 私達は一生懸命にやって、教授からも今迄にない良い出来だったと褒められた。(昭20理5)

• 軍人をゾルダーテンのやからと称してさげすんでいた。査閲も真面目ではなく、はだしやわらじばきの奴、ゲートル無しの奴も一人か二人位いたらしい(昭20理6)

• とかく世情は戦局とともに窮迫化し、習学寮も軍の意向も高飛車になりつつあると聞いていた。習学寮のモットー自治も危機感が迫っていたと感じた。それでも在学中、軍が勝手に五高内とくに寮に立ち入ったことはなかったと思う。憲兵が密かに入って「黄金文字」即ちトイレの楽書を書き留めて行ったとか噂を聞いた事がある。女人禁制は賄部と集会所は特別として厳守されていたようだ。ともかく査閲など偉そうに説教したい軍人の示威ぐらいに考えていた。

(昭20理6)

• 可もなく不可もなし。(昭20理6)

• 中学の時に比べると全く統制は取れておらずダラダラと言う通りに動いていた。(昭20理6)

• 楽しいことではない。下駄履きであったり足に墨を塗って黒くしたり茶化しているところがあった。(昭20理6)

昭和二二年

• 真剣に緊張していた。いずれ戦場に行く。みんな一所懸命でまじめだった。(昭22文2)

• 講堂での話があったが全生徒徒総スキャン(昭22文3)

• 大変真面目(昭22文)

• 特に反抗することはなかった。査閲が終わったらなるべく早く目につかない校外に出るように指示された。(昭22理1)

• まじめであった。(昭22理2)

• 査閲事件は昔語りとなっていた。そのせいか特記するような印象はない。(昭22理2)

• 中学校で受けた査閲に比べ全く安易であったように思う。(昭22理3)

• 概ね良好であった。(昭22理4)

• われわれのときは、査閲は無事終わった。特段、トラブルはなかった。(昭22理5)

• 奉公袋が必要で実家で探し回った。前々年の事件があったので真面

目にやった。(昭22理5)

・成績は悪かった。(昭22理6)

・誰も戦争末期が近いことを感じていたから、軍人や軍隊を信用するものは居らず、整列も満足にせず、だからだとやって講評は頗る悪かった印象あり。(昭22理)

昭和二三年

・あまり真剣な態度ではなかったと思う。むしろ反感を持っていた。

(昭23理2)

・特別な印象はなかった。あまり厳しい査閲はなかった。(昭23理8)

・行進も唯歩くといった程度でビツクリしました。(昭23理9)

3、昭和一八年査閲事件

① 経緯

昭和一八年

・査閲官の講演の時オカシイと思はれる発言があった？笑いが起こった。(昭18文甲3)

・自由奔放な五高生と形式ばった陸軍との間に反目あった時代なので最初から五高生を国賊扱いにしたので衝突した。(昭18理甲1)

・昭和一七年の夏だったと思う。第六師団司令部から、某陸軍少将が高五高に講演に来た。全校の教職員・生徒が講堂に集まって少将の話

を聞いた。どんな内容だったか全然覚えていないが、とにかく「軍人思想に凝り固まって、自由な思想の五高生から見ると、全く非常識で憤懣のもの」であった。従って、話の一章節毎に、冷笑と哄笑が沸き起こった。すると、少将は、「失礼だ！非国民だ！」と怒る。それが滑稽で、又大笑いになる。とうとう最後は、「五高はなんたる教育をしているか！教職員は責任を取れ！」と罵倒しながら去った。この時代は中学、高等、専門学校、大学等には現役の陸軍将校が『配属将校』として配属されて、『軍事教練』を行い、年に一回更に上級の陸軍軍人が『査閲官』として来校し、『査閲』の成績によって、その年の卒業生が入隊した時『幹部候補生』として採用される比率が決まることになっていた。この年の『査閲官』が発令されると、なんと五高で『笑い者』にされたあの『少将閣下』ではないか！次の『教練』の時間に、我が配属将校の『大佐殿』と『中尉殿』を囲んで、「あの『査察官』では、幾ら頑張っても、駄目ですね」と言うのと、『大佐殿』は「まあとにかく全力を尽くしてやろう！結果は問うまい」と言う。いよいよ『査閲』の当日がやって来た。教官も生徒も全力を尽くした。だが、…『査閲官』の『講評』はボロクソだった。「江戸の仇を長崎で討ちやがったな!!」全員がプリプリ怒って、ブツブツ言いながら査察のあった『渡鹿練兵場』から五高の運動場の『武夫原』に重い足を引きずって帰った。整列を終ると、配属将校の『大佐殿』が踏み台上がり、「今日は皆ご苦労だった！『査閲官』の講評は皆が聞いた通りだが、俺に言わせれば、非常に良く出

来た！」と言うと、ニッコリ笑った。全員が「関の声」をあげた！大きな拍手がこれに続いた！明るい雰囲気になり、疲れがイッペンに吹き飛んだ。（だって、旧軍では、「上官の命令は絶対である。天皇陛下の命令と思え」と教えられていたのに、配属将校の『大佐殿』が、上官の査閲官『少将閣下』の講評を否定する発言をしたのだから・・・。）第一には、配属将校は、生徒が全力を尽くして、良くやったと認めて呉れた事。第二には、現役軍人である配属将校でも、『五高の配属将校』はやはり、『五高』と『五高生』を良く理解してくれている。事を直観したのだった。（これからは、噂と私の推測による。但し真実に近い筈である。）ところが、五高生の中の硬骨漢数人が、『少将閣下』の官舎を探して押しかけ、議論を挑んだのだそう。話が噛み合う筈はなく、喧嘩別れとなった。『少将閣下』は『非常識』で『ワカラズヤ』で、度量の狭い『小人』だから、『軍』を『バック』にして、『憲兵隊』を五高の校長のところに差し向け、『少将閣下』をやり込めた『硬骨漢』の引渡を迫った。勿論、添野校長がこれに応ずる筈はない。これを知った硬骨漢は、添野校長を訪ねて、再び言論で『少将閣下』と渡り合いたいので許して欲しいと申し出たが、校長は「全て私に任せておけ、君等の直接行動はけっしていい結果にならないから」と諭された。（昭18理甲2）

- ・ 四月か五月、山口少将が講堂で講演された時、後ろの文乙、文甲三が下駄を鳴らして妨害し不面目と認め途中退席された。その後の査閲であったので色目で見られたのでせう。東大入学後、同じ山口少

将が来校され熊本某高校は不真面目であったと五高卒業生の前で言われた位ほんとうに怒っていたのでしよう。（昭18理甲2）

- ・ 具体的には覚えていないが、査閲官は高圧的偏見を持っていたようだった。五高生の方が冷静、常識的であったと思う。（昭18理甲3）

昭和一九年

- ・ 昭和一八年軍事教練の査閲が行われ自分が文科大隊式をとった。武夫原で文二甲二の訓練で査閲官が教官を叱咤し、執銃を命じ生徒はこれに抗議した。査閲官は配属将校を引き揚げた。私は文科代表として深草さんにあやまりに行った。彼は「いいよ、いいよ」と理解を示したが総て交代した。（昭19文1）

- ・ 戦争が激化してゆくなか、五高生のなかに軍人、軍国主義に対する反感が潜在していた。（昭19文1）

- ・ 査閲後の講評・講演で瑞邦館内で登壇した山口少将が文部省管轄の高等学校を陸軍省直轄下の教育機関に対することとき遠慮なき要求をつきつける言辞を弄するに至って我ら五高生が憤慨、反抗したものであって、今日に至ってもこれを痛快事として誇りに思っている。（昭19文1）

- ・ 講堂で講演中、皆で嘲笑した。（騒然となった）（昭19文1）

- ・ 査閲官が査閲終了后、全校生徒が並んでいる前で配属将校を面罵したため同級の阿佐見君が抗議したことからだと思う。（昭19文2）

- ・ 講堂で演説に來た陸軍の高級将官が、諸君は将校の予備である」と

言ったとき、多くの人が嘲笑した。するとその将校は「笑うとは何事か」と怒鳴って仁王立ちになった。その軍人が査閲に来た。(昭19文2)

・講演(山口少将査閲官)を野次った。(昭19文4)

・一八年、六師団の軍務局長(陸軍少将)だったと思う、五高でその講演会があった時「今や五高は予備士官学校である。」というような事を云った。これを五高生が冷笑したので、怒って帰ってしまった。ところが、その秋の査閲に現れたのは、その当人であった。五高生の目の前で配属将校の深草さん達を侮辱した。五高生は怒り出し騒然とした。(昭19文4)

・(配属将校が)生徒に好意的で、強圧的ではなかったから(昭19理1)

・昭和一八年春、熊本師団軍務局長に東京から一人の少将が着任。五高で講演を行った。(突然来校して講演を希望したが、学校側は事前に手続きを踏むように返答して一旦断ったので、講演前から感情的な齟齬があった。)講演は「もっと戦時下の学徒の自覚を持って」と云うだけの内容であった、生徒は静聴していたものの、「つまらない話」と無視している雰囲気は、講演者自身も感じた筈。校長はじめ先生方も厚遇する態度はなく通り一遍の応対であることは明らかで、立腹の様子で退出した。その後、警察や憲兵隊に、生徒の「手ぬぐいぶら下げ」などは戦時を弁えぬ態度として逮捕せよなど、いわゆる「学生狩り」を命令することもあり、五高に対する敵対心が露わであった。ところが、その軍務局長が秋の査閲官に決定したことが

分って、全生徒は動揺した。低い評価を理由に配属将校(深草大佐、人事権は軍)に累が及ぶことを強く憂慮した。生徒たちは自発的に対査閲の練習を連日熱心に繰り返し続けた(これほど全生徒が熱心に練習したことはない)。深草先生自身は「査閲は平素の結果を見て貰うものだ。その為の練習など不要」と悠然。当日、査閲時の分裂行進など、これほどの立派な行進はないほどであり、査閲官が指示する何れの行動も見事に進めていくうちに、生徒が全く未知の行動を指示した。「教わっていない」という返答を受けて、査閲官は教練の先生を「何故、教授していないのか」と罵倒した。(聞くところによると、後日一生徒が査閲官宅を訪問、生徒の前で宣誓を罵倒した行動を非難した由。)評価は最低で深草先生の更迭となった。戦地への赴任でなかったのが救いであった。その後、当軍務局長も転任になったそうである。

警察官・憲兵は生徒に好意的で、命令に従って形式的に逮捕しても、逃亡は放置という態度であった。長年の先輩たちが築いた地域の五高への信頼のお陰と思った。深草先生の後任配属将校には中国戦線から中佐の方が張り切って着任。生徒は厳しい訓練を覚悟したが、短期間で五高の校風を理解され、「これが本当の人間の世界だ」の発言など印象深い。

当軍務局長がほかの高等専門学校を訪問した際、校長をはじめ全教官が整列して出迎えるなどの厚遇をしたという話も聞き、当時の世相が思い出される。しかし、七高は五高と全く同じような態度で、

査閲なども同じ結果になったことが後日伝えられた。(昭19理3)

• 私の記憶では査察官がえらそうに訓示した時、皆で嘲笑気味に笑ったのが査察官の怒りを買ったように思う。(昭19理4)

• 第六師団兵務部長の講話の中で、五高生の服装を批評したのがおかしくて笑声が起こったのを「嘲笑」したと誤解して怒ったらしい。

これが一因ともなり、五高には反軍思想があるということになって、私は徴兵検査の時に検査官からそのことを指摘されたことがある。

(昭19理5)

• 配属将校が入れ代わったことは記憶するが「引き上げられた」ことは知らない、査閲の成績がよくなかったという話は聞いたことがある。(昭19理6)

• 確かに自分もその時の査閲に参加したと思いますが、その時の講評や配属将校の引き上げについては明確に覚えておりません、ただ、ある時第六師団兵務部長の陸軍少将(名前は山口?)が来校し、全生徒を講堂に集めて兵隊に対するようなお説教をしたことがあります。「五高生は時局認識が足らん。」「この非常時局下に女学生と肩を並べて街を歩く五高生がいる。」等というので生徒達はクスクス笑い出す、彼はますます怒り出す始末で、当時の校長添野信先生の困り果てた顔を今でも覚えています。(昭19理6)

昭和二〇年

• 査閲の最中に、生徒代表の抜刀指揮のやり方が不謹慎を極める!と、

教練教官の深草大佐の統率が悪いと云って、添野校長まで指揮の責任をとらされた。これがキツかけで座禪の大家添野校長がとばっちりを受けて満州の師道大学の校長としてとばされた。気の毒であった。(昭20文1)

• 全体に五高生が軍に反発した態度であったので査閲に来た少将が怒ってやったことと思える。(昭20文2)

• 講堂で講話した内容の中に、五高生は将来の軍の予備幹部だと云った時(高校生を予備士官学校生と云った)、聴いていた三年生の間から哄笑が起こった。それを査閲官が問題にして、配属将校の引揚げや校長の辞任などの事件となった。(昭20文2)

• 山口(?)と云った少将がやって来て軍国主義の講話をし、五高生の冷笑にすっかり立腹した事を覚えている。(昭20文2)

• 皆査閲官を馬鹿にして笑い倒した。それで校長が後に左遷され結局満州で亡くなられたと聞く。(昭20文3)

• 査閲により配属将校の教育指導が不十分だとして、配属将校が交代させられた事件(昭20文4)

• 文乙の僕らは、問題とならないと見て、教官が最後の閲兵式まで寮で寝ていてくれということだったが、一寮一階の部屋に居たら、俄に外が騒がしくなって、査閲を拒否したらしい文二?甲三の人達が帰ってくるのを見ました。(昭20文4)

• 当時の五高校長の階級と師団長の階級の差で校長の方の格が上だったので、査閲時に壇上に立つのは師団長ではなく、校長だと当時の

上級生が行進をとめたことによると思う。(昭20理1)

・師団長の一方的な人事と考える。(昭20理1)

・私など、生徒はあまり知らなかった。「何か、叱られた？」位である。

(昭20理2)

・その場にいたのでよくおぼえている。熊本の六師団の某大佐が全学生を集めた講演で、「今や五高も陸軍士官学校と同じ」といったところ、上級生を中心に(私は一年生だった)どっと爆笑がおきた。

大佐は大いにいきなり、これまでの学生に人気のあった配属将校がひきあげられ、たしか「ラバウル帰り」といわれた野蛮な配属将校がやってきて、私自身馬上からムチでぶんなぐられたことがあった。

校庭で空襲警報が出たときゲートルをまいていない学生を見つけると、彼は警報を知らせる木のかんばんで学生をなぐりつけていた。

(昭20理4)

・入学したところ山口少将来校、「第五高等士官学校と改称すべきである」と云ったトタンに笑声、罵声、足踏、拍手。深草大佐が交替となったのは査閲ではない。あとには幼年学校の軍経験者がきた。腰が低すぎてこれ又バカにされた。(昭20理4)

・講堂での集会、後方に顔だけ出していた。前方で何かさわがしかったことのみ(昭20理5)

・よくわからない。上級生が何か言ったのかも。配属将校が交代したことだけは知っている。講評は概ね可でした。(昭20理5)

・入学してそう経っていない頃、師団から毛利少将という人が来て、

講堂で講演があった。この時「高等学校は将来陸軍の予備士官学校として・・・」との発言があり、これを生徒が野次った。彼は憤然として壇を蹴つて降りていった。これが引き金となって、査閲で×を付けられ、兵隊に行つた五高生に「五高、あの不良学校か」と上官に言わせた風評があった。添野信校長もこの煽りをくわれた。

(昭20理6)

・査閲官が査閲の前来校し学生を集めて説教し侮辱的な発言をしたので哄笑と共に拍手喝采して送り返し怒って帰ったらしい。そのあとの査閲だった。五高には反軍思想がみなぎっていると捨てぜりふを残して怒っていたという。それ以来我々が外出すると六師団の憲兵があとをつけまわし言動を見張られるようになった。亦、寮に立ちより全員の本棚から赤寄りの著作物を押取、笑止千万だったのはスタンダールの「赤と黒」を赤と名前のつく小説まで持つて行った

(昭20理6)

・山口少将(外に家来が何人か従ってきたが覚えぬ)が閲兵分列行進とか戦闘訓練などを視察したのち、最後に大講堂にて全般的講評が述べられることになった。一年生のわれわれは一階の椅子、上級生は二階で聞いた。ともかくその少将は初めから高圧的でもしかかも下劣な言を吐いて、満場大声で嘲笑を挙げ、とくに二階に陣取つた二、三年生は足を踏み鳴らし「やめろ」「帰れ」とか叫んで講演(?)も尻切れになって少将殿は憤然と壇を降りた。私が覚えている彼の言葉は「熊本の某高等学校の生徒が映画館のお茶子の手を引

いたという噂を聞いた。」とか、「各学校を巡って最も程度がわるいのが五高で、その次悪いのが七高だ」という件だ。七高が最低で五高がその次という風にも聞こえたが、それはどちらでもよい。前のほうでこちらを向いて並んだ教授のなかで大口開けて笑った浅井教授のことは同窓誌に書いた。こうして騒然の中この日は終わったが、五高卒時召集されても将校になる幹部候補生の資格を剥脱されることを心配した。また後年の事実を知りたい。(昭20理6)

・戦争はどちらが勝つかと言う問に対し、いずれかが勝ちどちらが負けると言う返事に一同が笑った事が査閲官の逆リンに触れた。(昭20理6)

・査閲官と思われる(六師団長かと思っていました)講堂で全学年集合して話があり、何か天皇に帰一するということのように言っていたが途中で「止めろ」「馬鹿言うな」の声が上がり、それで全員近くが大声で中止と叫び途中で止めて帰って行った。(昭20理6)

・査閲官山口少将の発言に対し罵倒発言を加えた。(昭20理6)

## 昭和二二年

・我々の入学時の人が若い人にならわって我々の学年が反発、将校が丈上部に報告、軍部が引上げ校長が陳謝したとかしないとかあまり関心はなかった。思い出しました、査閲の時に来た少将(或いは中将)の講話があり、その時の五高生の態度の悪さに怒った將軍が配属将校を引上げたと聞いた。その時校長が謝ったらしい。講話の時の

我々の態度は笑い声を立てる等あまり行儀のいいものでなかったのは確か。(昭22文3)

・査閲官の訓示に対して揶揄で答えたという伝聞の外に詳細は知らない。(昭22理甲5)

・軍人の常識と五高生の考えが余りに違うので軍人が真面目に話しているのを笑ったので不謹慎と受け取られた。(昭22理5)

・私は一九九年入学なので、この事件については、三年上の五高生だった兄から聞いているだけで、現実には体験していない。在学中も上級生が動員で学校に残っていなかったため、この話はあまり話題にならなかったと記憶する。(昭22理7)

## ② 教職員の対応

### 昭和一八年

・あまり変わらなかった。(昭18文甲3)

・高校教育を本分・任務と考えておられたと思う。(昭18理甲2)

・校長、教授の反応は冷静であったと思う。特に五高所属の配属将校、教練教官はすべて生徒側の見方であったと記憶している。(昭18理甲3)

### 昭和一九年

・記憶せず、ただ生徒に対して批判的な言動は一切なかったと思う、その事で校長、教授達への敬意を深めたようだ。(昭19文1)



- ・事を穏便におさめるため相当苦勞されたと思う。阿佐見君にもおとがめはなかった。(昭19文2)
- ・冷静(昭19文4)
- ・傍観者(昭19理1)
- ・動揺があったと思うが、窺い知ることは出来なかった。(昭19理5)

#### 昭和二〇年

- ・反戦思想の根強い教授、校長が軍の思想統制にかきまわされるのはイヤだという空気が五高では強かった。(昭20文2)
- ・特になかった。(昭20文2)
- ・立派(昭20理1)
- ・傍観(昭20理4)
- ・知らず(平静じゃなかったか)(昭20理5)
- ・成行きにまかせたようで特別な反応はなかったよう。(昭20理6)
- ・添野校長は沈着高潔の方であったが、のちに随分苦情を受けられたであろうが、この件について生徒を一切咎められなかった。間もなく転出されたが、学半ばで出陣される生徒の送別宴には出席されている。他の教授方もこれを話題にされたことはない。さきの浅井教授など査閲官を「あいつ等は単純でバカだからねえ」と笑っておられた。(昭20理6)
- ・返答が哲学的であったので生徒と共に笑った。(昭20理6)
- ・何事もなく学生の行動を中止させるようなことはなかった。(昭20

#### 理6)

- ・生徒の見る所表立った反応はない。(昭20理6)

#### 昭和二二年

- ・わりに無関心?(昭22文2)
- ・校長は軍部に謝罪したと聞いたが教授たちはいずれも無関心の様子(昭22文3)

- ・どなたもあまり熱心ではなかったように思います。(昭22理3)
- ・前年の事件があったにもかかわらず、校長、教授方には全く緊張した様子はなかった。そもそも査閲の場に教授の姿があったかどうか記憶にない。(昭22理7)

#### ③ 生徒の対応

#### 昭和一八年

- ・オカシイと思う者が多かったか?(昭18文甲3)
- ・ひやかしてみたいな態度はあった。山口少将も悪意を持って来校され、受ける五高は普通であった。結果は不合格。(昭18理甲2)
- ・生徒はすべて一致して山口少将を批判していたと思う。(昭18理甲3)

#### 昭和一九年

- ・毅然として査閲将校に対応した。(昭19文1)
- ・査閲官こそが不遜無礼の暴言者として激昂、口笛足踏み揶揄して、査閲官の講評及び講演を中斷、降壇のやむなきに追い込む、又、五

高の後に査閲する高校にも連絡して、「馬鹿者の款待」を唆したとか。

(昭19文1)

・静かになりゆきを見守っている感じだった。(昭19文2)

・私たち二年文甲二は、講演があった翌日、休み時間に「学園の自由」を乱す者と抗議集会を開いた。査閲のときの記憶ははつきりしない。

(昭19文2)

・反対(昭19文4)

・学生の一部は怒り、倉庫より銃を持ち出そうとしたりした。教授が必死で静止した光景が目にかぶ。(昭19理1)

・時代だから仕方がない。(昭19理1)

・目立った反応があったとは思われない。(昭19理5)

昭和二〇年

・生徒たちも教授、校長と同じ思想の土じょうにいたので(昭20文1)

・私達生徒は、三年生はさすがに偉いと快哉を叫んだ。(昭20文2)

・反抗的(昭20理4)

・無反応(昭20理5)

・一年生はなにもなかった。(昭20理5)

・無視、憲兵に捕えられ軍の牢獄に入れられないよう無駄な抵抗はしなかった。(昭20理6)

・間もなく深草大佐も退職されたし(あるいは退職させられたし)それまで真面目に訓練も行っていたものが気合が抜けたような感じが

した。(昭20理6)

・査閲官が非人間的な対応をしたこと(ある生徒を馬上から鞭で打った)に対して、全員反発、号令に従わなかった。(昭20理6)

・あまりに客観的な返事であったので一斉に笑った。(昭20理6)

・軍人に対する反感は皆持っていたようで特に反対するものはなく皆一緒に行動していた。(昭20理6)

・特に反応はなかった 言いたいことをいったまで(昭20理6)

昭和二二年

・みなわりに知らなかったらう?(昭22文2)

・総反発、冷笑、右翼の生徒も多かったが同じ反応(昭22文3)

・配属将校二回交代したように思う。着任後はきびしかったが、次第に五高になんかで軟化していた。当時先生に会えば何処でも脱帽

して一礼した。これを配属将校は拳手敬礼をするように指示したが、

誰も従わず、従来通り脱帽一礼した。(昭22文)

・五高生は軍人を「ゾル」と云い蔑視していた。適当にやっておこうという程度?(昭22理3)

・到って平穏であった。(昭22理4)

・二年生は一八年の査閲の経験者だが、その話を上級生から聞いた記憶がなく、警戒、緊張する様子は全くなく、一年生は更にのんきであった。不思議なことに配属将校、教官から、前年のことを引合いに出して特別な注意をせよというような話はなかったように思う。

(昭22理7)

④ 感想

昭和一八年

- ・軍の思想と大分へだたりがあるみたい。(昭18文甲3)
- ・あの査閲官では公平な査閲はできない。軍部の暴力だった。(昭18理甲2)

・別に変なことはせず、まじめに査閲を受けた。査閲する側が先入観あって色目で見たのでしょう。(昭18理甲2)

・後日談がある。昭和一九年東大工学部教練の査閲官として現れたのが山口少将で公評の際「熊本の某高等学校は反軍思想で…」と厳しく批判をしていた。(昭18理甲3)

昭和一九年

・第六師団司令部が五高生の時局危機が足りないと偏見を持ち、それを純粋な五高生が独立の龍南精神で対応した。校長も学生を理解してくれていた。(昭19文1)

・当時の旧制高校内にあった反軍思想(昭19文1)

・五高生が特に軍に反抗的だったとは思わないが、高校生の生態を知らない軍人には何とも度し難い生物に見えた事と思う。それが叱責の言葉となり、これに若い正義感が高じておこった事だと思う。

(昭19文2)

・昭和一八年頃、五高に軍人批判の自由主義がつよくあったことを誇りに思っている。(昭19文2)

・軍国主義(昭19文4)

・変な憂うつな思い。(昭19文4)

・好意的で正動なこと。配属将校の方が正常だと思った。(昭19理1)

・これは大変なことになったかなと思った。(昭19理4)

・職業軍人と一般人殊に高校生のメンタリティーの相異に戸惑いを覚えた。(昭19理5)

・この事と査閲との関係は覚えていませんが、その時の査閲官は恐らく同一人物ではなかったでしょうか？陸軍というのは、ずい分泥臭くて目先の小さな集団だと思いました。(元々陸軍は嫌いではあつたが)(昭19理6)

昭和二〇年

・旧制高校的な自由の雰囲気は刻一刻と軍部の思想統制下に入る前兆が出始めたと感じたことでした。(昭20文1)

・五高を陸軍予備士官学校と思っているとの発言があった。世の中を知らない馬鹿野郎と思った。(昭20文2)

・軍事主義の一件であった。(昭20文3)

・大した事ではないと思っていました。事態が大きくなりあげられ、びっくりしました。(昭20文3)

・最後の閲兵式に出ただけで、一九年には配属将校もいないし、工場

動員に行ったので、一八年の一回きりの査閲でしたが、日本陸軍と五高とどちらが強いかなどと言って五高生の意気は盛んでした。

(昭20文4)

・陸軍師団長の態度から、日本の敗戦を予測した。(昭20理1)

・私自身その場において、やじったり笑ったりしたわけではないが、戦時中の五高生は自由な考え方をする青年が、意外と多かったように思う。寮の部屋の中にアメリカの女優の写真をべたべたはって、日本の陸軍の戦闘機はやぶさはペーパープレーンだといって、よくおちることを得意に話す男がいたが、あまり不思議には思わなかった。

(昭20理4)

・査閲そのものは事件とならなかったと思う。(昭20理4)

・負け戦さも末期に近くなり、より一層の引きしめにかかった軍の態度が見えかくれた。(昭20理6)

・生徒一般も戦局を憂い、戦陣に立つ訓練を拒んではない。それを吾々自由、自治を曲解して放将の徒の類と見て、軍人至上主義のもと彼等の威令の下に規制化しようとする動きを拒んだわけである。

この事件も私の素晴らしい五高時代の追憶となっている。(昭20理6)

・自由を謳歌する五高生を軍部は敵視していたので、常に対立していた軍人の横暴には黙っていなかったと思う。(昭20理6)

・後に配属将校、校長に患が及んだ事を考えると当時の軍部が如何に権力を持っていたか思いしらされた。(昭20理6)

・全国一斉に挙国一致の声が大きい時高等学校の中はリベラルな空気

が残っているのが非常に愉快でした。(昭20理6)

・大きな社会的問題に発展しないことを希望(昭20理6)

昭和二二年

・軍の考え方に我々は反発したが、深く考える人は日本の将来を見通したかも知れない。(昭22文3)

・理科の生徒は極く真面目であったと思う。(昭22理4)

・五高生は別に悪気はなかったが、その自由主義的な考えとコチコチの軍国主義と余りに違うので笑い、悪意に取られた。(昭22理5)

4、五高と戦争

① 戦争の情報(無記入119件、記入105件)

入らない(58件)

不知(15件)

ラジオ・新聞等政府発表のみ(11件)

入っていた(21件)

昭和一八年

・情報は入っていた(昭18理甲2)

昭和一九年

・習学寮の小使室(玄関入口)でフィリピン戦線から帰ってきた人の

手柄話をきいたことあり (昭19文2)

- ・特に教練の先生から、毒ガス使用やノモンハンの敗戦など、当時公開されていない多くの実情を伺った。(昭19理3)

## 昭和二〇年

- ・時々入っていましたし、殆ど全員が戦争に批判的でした。(昭20文3)
  - ・佐世保兵器工場で情勢わるしときいた。(昭20理1)
  - ・一切なし、ただ英語の山田教授は短波受信機をもっているという噂、真相をほのめかした。(昭20理4)
  - ・台湾沖、フィリピン海戦後の空母が続々とドックに入るのがいたましかった。(昭20理5)
  - ・先輩、主として技術士官から時々 (昭20理5)
  - ・当時の朝鮮半島からの同クラスの友人より、本当の情報を知ることができた。(昭20理6)
  - ・大勝利の報道ばかりで真実の状態はわからなかった訳だが、海軍に動員されて造艦しているうち、踵を接するように沈没艦が増えて実態の一端を知る。(昭20理6)
  - ・別ありません。英語の時間韓国人の学生をそそのかしてドル先生に独乙の戦争状況を聞いて授業時間を費して喜んでいました。(昭20理6)
- ## 昭和二二年
- ・五高二年生の時に民家に下宿していましたが、同じく近くに下宿していた同年の友人が夏休みで帰郷し帰途広島県広島駅を通り

「広島に新型爆弾が落ちたぞ」との感想を話してくれましたが聞いたのは昭和二〇年八月だったと思うので、それが原子爆弾だったと思います。(昭22理1)

- ・教授の中に戦況を語る人数名あり、興味を持って聴いた。(昭22理2)
  - ・僅かにあつて居たと思うが私は余りに気にしなかった(昭22理4)
  - ・在学中の朝鮮人学生は終戦を既に知っていた様で、殆んど学生が帰国(朝鮮に)していた。(昭22理6)
  - ・ラジオを聞いている暇は殆どなかった。新聞はタブロイド版二枚が遂に一枚になった。日本が無敵の戦艦、大和・武蔵を持っていると友人に教えられ、喜んだのが二〇年一月のこと、その時武蔵がレイテ島で既に撃沈されていたこと等、知る由もなかった。戦場が沖繩に移り、6月に玉砕していたことは同時的に知っていたと思う。(昭22理7)
  - ・特に情報はなかったが、私は従兄が海軍士官だったので割合戦況は判っていました。(昭22理8)
  - ・時々入手(昭22理8)
- ## 昭和二三年
- ・友人間ではいつていた。(昭23理4)
  - ・アメリカ兵が天草に上陸するから熊本に来るぞと言われていました。(デマ)(昭23理9)
  - ・入っていた。(昭23理9)

・戦況が不利なこと、新型爆弾が落ちたことなど聞いた。(昭23理9)

昭和二四年

・先輩から負けるだろうとの情報は入った。(昭24)

② 生徒間の情報交換(無記入123件、記入101件)

不知(16件)

しない(34件)

した、できた(49件)

できない(2件)

昭一七年三月

・特別にできなかったが、気の重いことだった。(昭17・3文乙)

昭和一七年九月

・ほとんどしなかった。主流は「鳴かず飛ばずにいしばし鼓空の翼養はん」であった。(昭17・9文甲2)

・日米交渉の話はしていた。(昭17・9文甲2)

・あまり話題にならなかつたと思う。話題の制限はなかつた。(昭17・9理甲3)

昭和一八年

・日米開戦(昭一六)時はかなり興奮した記憶あり、クラウダー英会話教授は苦境にあった。(昭18文甲3)

・出来た。戦争の前途を冷静に考える者もかなりいた。(昭18理甲1)

・中学時代の級友が陸士、海機等に進んだ者が帰って来て色々な情報を教えてくれた。ノモンハン事件の情報、ラバウルの話も聞いた(昭18理甲2)

昭和一九年

・戦争の推移について話をする以外、特になし。英語の外国人教師はクラウダーがいなくなつて、どうしてそうなつたのか衝撃をうけた記憶あり。(昭19文1)

・五高を卒業する一九年九月まで比較的平穩、八幡製鉄動員中空襲あり。(昭19文1)

・戦況についてあまり話すことはなかつた、それぞれがそれぞれに感じていたことはあつただろう。(昭19文3)

・動員中、長崎港外で軍用船が撃沈された噂が伝わった。(昭19理1) 必要ならば俺達も加わるべきであり積極的な協力でなくても仕方がない。(昭19理1)

・頻繁ではなかつた。昭和一七年頃でも戦争の状況に対して、生徒たちはすでに樂觀的ではなかつた。(昭19理3)

・昭和一八年当時、戦況は悪いらしいなどと友達同士では話していた(昭19理4)

・五高在学中余り話題にならなかつたが、長崎造船所動員中には戦況が不利との噂があつた。(昭19理5)

- ・同じ下宿の友人たちといろいろ話をしたのであろうが、話の内容は思いつくすべもない。昭和一八年初秋のイタリアなどか。(昭19理6)
- ・報道に対する疑問(昭19理6)
- ・情報が少なく、あまり話すことは無かった。(昭19理6)

## 昭和二〇年

- ・将来、幹部候補生として(昭20文1)
- ・戦争の話は生死の問題として話し合った。(昭20文2)
- ・昭和一九年になり、どうも戦争は敗れているらしいと云う話しをした。アメリカに比べて飛行機の量が大変不足していると云った事等々。(昭20文2)
- ・特に動員中造船所に派遣された海軍将校(先輩)から敗戦は決定的だと聞かされた。(昭20文3)
- ・話してきたが、表立った反戦の話は無かったと思う。(昭20文3)
- ・話をした記憶はありませんが、ドイツの敗戦が決定的となった時に、ドイツ語の時間にドルさんにそのことで感想を求めた友人が居て、ドルさんが深刻な顔をしたことを憶えています。(昭20文4)
- ・小生はノモンハンによる敗戦を満州で見聞しており、二年後に米國相手の戦争には勝目はないと予測しており、五高の友人にも話をしておいた。(昭20理1)
- ・話はしたが、まだそれ程戦況はぎりぎりの状態ではなかったので、過激な話などはしなかった。(昭20理4)

- ・「勝つてはないな」などと話し合った。(昭20理4)
- ・特に大阪の方から敗戦の話が多く入った。(昭20理5)
- ・どうせ召集されて死ぬものと思っていた。(昭20理5)
- ・話は自由に出来たが、身回りの生活の話が多かった。(昭20理5)
- ・負ける戦争は早くやめてもらいたいとお互い話し合っていた。(昭20理6)

・あまりしない、本当の勝ち戦ならばこんなに困窮すまいという疑念が強かった。むしろ、読書の話題交換、哲学的思惟、人生観について恋愛について、そういうものが主であった。さながら強いて戦争の話題を避けるように。(昭20理6)

- ・ドイツがどうであるかドイツ語の外人教師ドルさんに訪ねた。又、サイパンの玉砕等話をした。(昭20理6)
- ・あまりできなかった。大本営発表を信じるしかなかった。(昭20理6)
- ・韓国から来た人たちの間で独立運動はありましたが、特に殆ど無関心でした。(昭20理6)
- ・教室において二〜三人で話をしたことはあります。石油も鉄もないのに戦争など続けられないなど。(昭20理6)

## 昭和二二年

- ・できた、一部で勝てない等を話していた。(昭22文ロ)
- ・できました、敗北の下り坂という感じを受けました、今後どうなるかの話。(昭22文2)

- できたが、必ず勝つとは誰も言わなかった。(昭22文)
- 自由に話しをしていたが戦争や負けるといふ話は皆好きではなかったようだ。(昭22理1)
- 話は出来たが明るい話はなかった。戦争に勝利するという意見は殆どなかった。(昭22理1)
- もう負けるしかないのではないか？(昭22理2)
- 長崎の寮生活では情報乏しく、話は食べ物の方へ長崎の街まで歩いて約50分チャンポンを行列して食べる。(昭22理2)
- 生命の切迫感があったが語り合ってはいない。最後の覚悟だけはきめざるを得なかった。(昭22理3)
- 哲学書など読書で過ごし余り考えなかった。(昭22理4)
- 話は自由にできた。軍にはその有無を云わさぬ統制に賛成していないが、国を護る愛国心は人並みに持っていた。戦争の話をした記憶はない。(昭22理5)
- 作業班の班長が八月七日に、六日に原爆の落ちた広島を通って帰熊し、広島の様子を聞いた時、新型爆弾は原爆だと語り合った。(昭22理5)
- 広島、長崎に落とされた新型爆弾が原爆であるという風評が学内に伝わっていた。(昭22理6)
- サイパン玉砕で敗戦はきまると私自身は受止めていたが、そんな話を公然とすることは勿論出来なかった。気を許した僅かな友人にはしゃべっていたと思う。永松譲一先生とはよく戦争の話をしたし、

- 先生も心を開いて相手をして下さった。(昭22理7)
- 戦況不利、敗戦の危険(昭22理8)
- できた。(新聞・ラジオ報道の受け売り)(昭22理8)
- 絶えずしていた。度重なる空襲や艦載機の襲来があったが、不思議と五高キャンパスへの攻撃は無かった。文化施設五高を攻撃しないとはさすがだなと言いつけていた。(昭22理)

#### 昭和二三年

- 広島、長崎の新型爆弾について、原子爆弾ではないか、と友人達で話合った。(昭23文甲)
  - 戦争は敗けるであろうという予感を皆持っていたと思う、米兵の上陸の話など、時々話題になっていた。(昭23理2)
  - 長崎原爆のあと新型爆弾の噂と白い服が熱を反射して良いらしいと話したりした。(昭23理2)
  - 戦争の話をしていた記憶はありません。勝つものと信じていました。(昭23理2)
  - 米軍が九州に上陸してきたら玉砕だなあと話し合ったものです。(昭23理3)
  - 誰とも会わぬ。(昭23理8)
  - 何の話もできたが、特に戦争の話は余りしなかった。(昭23理9)
- 昭和二四年
- 戦況は不利だとの話はした。(昭24)



③ 五高と軍隊との関わり（無記入122件、記入102件）

不知（15件）

ない（73件）

あった、その他（14件）

昭和一七年九月

・二、三年時、子飼橋近くの下宿に応召兵を同宿させたことあり。（昭17・9理甲3）

昭和一八年

・馬術部で騎馬連隊、野砲連隊に出入りしたので、或る霽開気は判った。（昭18理甲2）

・特になし、但し馬術部は軍の馬を借り、練兵場で乗っていました。

（昭18理甲3）

昭和一九年

・騎道部だったので、二週間に一度、騎兵隊の馬場をかりて練習していた。（昭19文2）

・馬術部の人たちは仲良くしていました。（昭19文3）

・通常はなかった。昭和一七年夏期休暇を通信技術訓練のための名目で健軍地区の陸軍通信隊に入隊して過ごし、軍の日常生活の実態を経験。とくに「暴力」に対する考えに決定的な影響を受けた。（昭19理3）

・ほとんどなし、一度だけ軍事教練の一環として第六師団輜重連隊を見学に行き、連隊長から陸軍将校らしからぬスマートな話を聞き、

陸軍にもこんな柔軟な考えの人がいるかと感心したことがある。

（昭19理6）

昭和二〇年

・帯山練兵場での観兵式には出席した。（昭20文2）

・軍人は余り好きでない連中が多かったのではないだろうか。大江橋の袂の古本屋で偶々北一輝の××だらけの「国家改造法案」を見つけて持っていました。そのことを知っている友人が教導隊の大尉が見たいと言っていると持っていたことがありました。平泉派の關係で交流していた者は居たようです。（昭20文4）

・昭和一九年頃、通信部（モールス信号通信）に入っていたので、六師団内の通信隊で一日、実地訓練をした。（昭20理2）

・見学位のもの（一日のみ）（昭20理5）

・生徒主事田中教授と出陣学徒で大江地区に面接に行ったことがあります（昭20理6）

昭和二二年

・原爆投下後終戦までの数日間は爆心地一帯の整地作業に従事したがその際オーストラリア人の捕虜を指図して作業を行った（昭22理2）

・通信班として一六部隊へ行った（昭22理4）

#### 四、聞き取り

有田 哲哉 昭和一八年文乙卒業

(二〇一〇年三月二七日 於…五高記念館前)

山口少将の講演・査閲の場面に遭遇した有田哲哉氏に当時の様子について聞き取りを行った。



昭和一八年の査閲とそれに関連することについてお聞かせください。

昭和一八年のたぶん四月の終わりぐらいではなかったかと思えます。山口少将がやってきて、「今から全校生徒を集める、俺が講演する」ということを配属将校の深草大佐に言ったわけですよ。深草大佐が、「それは困ります。学校というのはそんな今からというわけにはいかない。前もって何月何日何時と言っておなければだめです。」と断った。

深草大佐が、最初講演を断られたのですね。

私はそう聞いています。最初に深草大佐が応対するのは当たり前ですね。配属将校ですから。あるいは深草さんが校長に話して校長が断ったかもしれない。けれどあの当時の常識なら当然深草さんが断っていると私は思います。

それで山口少将は、第一不満なんです。あのころ軍隊はなんでもいうことは通るんですから、それが追い返されたわけですよ。

そして改めて何日か後に、全校生徒を集めて講堂で講演会があった。で、彼が講演を始めたんですが、「腰に手ぬぐいを下げて、破れた帽子で汚い格好をして」とか何とかそういうことを言い出したんですよ。

しゃべりだしてすぐね。それでね、私は文三乙(文科三年乙組)で講堂の一番後ろの席だったんですよ。みんな下駄ばきですからね。下駄をがたがたとやらして。私もやりました。がーとやって、それで山口少将がしゃべれなくなりましたよ。一八年の四月の終わりが五月くらいだったと思いますよ。五分間で講演できなくなって帰っちゃったんですよ。

それで、ものすごく第五高等学校に対して不満があったんですよ。それでもできて、教練の査閲があった。教練の査閲は全国中学校以上は全部あるわけですね。不合格なんていう学校は聞いたことがない。それが五高は不合格になった。

査閲の時はどうでしたか。

帯山の練兵場でやったんですが、一年から二年、三年と各クラスごとになんかやるわけですよ。私のクラスは、一人ずつ、すぐその窪みまで鉄砲を持って走っていく。窪みに入って、鉄砲を打って、そしてまた鉄砲持って、走って行って向こうの塹壕に飛び込む。といううようなことをやりました。よそのクラスが何をやるか知りません。文三

乙は査閲の最後の最後で、文三乙が終ったたらその日の査閲は終りなんですよ。

我々の教練が始まる前、向こうのほうから、少将一行がぞろぞろやってくるわけですよ。その一〇メートルか二〇メートル前に深草大佐が来たから、我々のクラスの小隊長が、深草さんに「査閲官が来たら敬礼してからはじめますか。」と聞いたんですよ。それらもう深草さんは何かで怒っているんです。「ああもう敬礼なんかいらん、やれ」とそういうんですよ。

それでね、査閲官がそばまで来る前にもう我々始めたんですよ。一人ずつ、行って伏せて打って、又走って向こうへ行く。それがちょうど私の目の前まで来た。私の前の前が岡井君といって、一年以上からダブって来た男だったけど、「おれは兵隊は嫌いだから兵隊いかに医者になる」と言って、文科から新潟医大に行つて産婦人科の医者になつたんですけどね。その岡井君が鉄砲を持って走つて行って射撃をして、向こうの塹壕に行かなきゃいかに窪みのところで動かないんですよ。だから私の前のやつが行かれんわけですよ。それで、少将じゃなくってお供が言うたと思いますがね。「こら、なにをしとるか」と。そしたら岡井君が、これは実におもしろい愉快な男ですね。やおらそこにあぐらをかいて座つて、「それ孫子に曰く、前方に煙立つは伏兵ありと。」練兵場のはるか向こうのほうにね、煙突か何かあつて、煙がこう立つてたんですよ。前方に煙立つは伏兵ありと。伏兵がいるからおれはいかんと。それでね、もう査閲官カンカンになつて怒つてそのま

ますーつと行っちゃった。

そこで中止ですか。

中止、中止。そのまま行っちゃったから、私なんか何もしないで終つたんですよ。私は目の前で見ていましたから、よく覚えています。最初に来て断られ、講演では下駄を鳴らされて講演できなくなつて、今度は査閲ではなつとらんと。それで第五高等学校教練不合格と。全国の中学校以上であるところ不合格というのは他にないと思いますよ。

前の年まで査閲は合格していましたね。

もちろん、合格。

これは聞いた話ですが、私らの一年下の連中が五高に入って、恒例の阿蘇登山に行った。その最中に観光バスに会つて、それを武夫原頭にを歌い踊りながら困んで動けなくしちゃつた。その上何人かがバスの天井に乗つて、バスが壊れたんですよ。どうもそのバスに乗つていたという話なんですよ、あの少将が。熊本に赴任してきて間もないころで、それが査閲の約一年前なんですよね。

教練は中止になつて、その時はそれで終わったのですか。

講評というのがあつたかどうか記憶ないんですが、あつたとしたら、むちゃくちゃな講評だつたと思いますよね。その場で不合格と言われたかどうか記憶にないんですけどね。

私は卒業したあと、一八年の一二月に兵隊に入った。その前に大学

に二か月ばかり行きました。大学では、「とにかく教練に三回は出る、三回出れば幹部候補生の資格がとれるから。出ないと五高出身のやつは（五高時代の教練が）不合格だから幹部候補生になれんぞ」と先輩に言われました。だけど私は中学の査閲で合格しているからなれたんです。私は中学校を五年で卒業して五高に入りましたので、一八年には兵隊に行つて幹部候補生になりました。中学四年修了で五高に来た連中は、我々と一緒に五高を卒業したけれど年齢の規定で翌年の一九年に兵隊に行つた。この連中の中には幹部候補生になれなかったのがあるんですよ。中学校を卒業していないと中学の（教練合格証明書）がない。それで幹部候補生になれなかったのが私の友達で一人います。軍隊に入つてから大きな影響があつたわけですね。

それはありましたね。要するに幹部候補生になれないということは普通の人と同じように兵隊からずつといかなければならない。幹部候補生になるとすぐ訓練受けて見習士官になって、将校になりますから前の年までは合格していたとすると、高等学校では三回査閲に合格しなければならなかつたということですか？

卒業する年の査閲に合格しなければならなかつたと思います。

戦前は軍隊の力が強かつたので、五高でそういうことがあつたというのが驚きでした。

それはね、驚きもいいとこね。あの時代にそんなことがおこるなん

て考えられないんですよ、一般には。それを我々がやつちやつたわけですよ。我々は反戦でも何でもありません。要するに反山口少将ね。あれがへんなことばつかり言うからね。ばかじゃないかということ。

社会党の代議士をやつた田英夫、あれが大学で同じ学年だったんですよ。五高で私と同じクラスの桑先というのが田と同じ東大の経済だね。『五高はよくやつたな』と田に褒められたよ』と言っていましたね。

その後、深草大佐や山口少将の話は聞かれましたか。

知りません。もう卒業した後はね。いい人だったんですよ。深草さんという人は。陸軍士官学校では山口少将より先輩ですからね。少将と大佐だけでも。

あのころ、山口少将が「第五高等学校の反戦思想について」という論文を書いているんですよ。赤い表紙の、『偕行』という将校用の雑誌があるんですよ。その昭和一八年の五、六月から一九年くらいの間を調べると載っている可能性があります。

五高生としては、反戦ではなく反山口少将だったということですか。

そうそう、反戦思想なんてありませんよ。あつても、ごく一部の人間にあつたかもしれない。でもすぐつかまつちやうから。口に出して誰も言えませんよ。

これは聞いた話ですが、山口少将が西の門のほうへ馬に乗って出て行こうとした。その左側に奉安殿があつた。あの頃、林があるから

奉安殿がちょっと見えないんですよ。そこを馬に乗って通り過ぎようとした時に、僕らの下の二年生の誰かが、「おい、奉安殿に敬礼はせんのか」と言うたらしい。それでね、びっくりして馬から飛び降りてね。そういうエピソードも聞いています。一年下の連中も覚えているのが大分いると思います。

査閲の後、先生方からは何か話がありましたか。

全然ない。むしろ先生によつてはよくやつたくらいな気持だったと思います。その時の校長先生の添野さんが禅坊主でね。これは偉い人でしたね。あのころの高等学校の教授というのは、戦争にあまり左右されないで教育を一生懸命やってくれた。ただ私たちの次の年からは学徒動員が始まった。高校生活が満喫できなかつたでしょうね。我々が最後の高校生ではないでしょうか。そういう意味では。



行軍（昭和18年文甲二アルバムより 緒方秀逸氏寄贈）

## 五、座談会 五高十八年会

五高十八年会は、昭和一八年の卒業生を中心とした会で、東京、京都、熊本を持ち回りで毎年同窓会を開いている。二〇一〇年は三月二七日に第六十七回熊本大会が開催され、約五〇名の参加があった。これを機に、六名の出席で座談会を開催した。

出席者 入江 正信(文乙)(五高当時松本、昭和一八年寮物代)

古賀 與平(理甲二)

佐川 敏明(文甲三 昭和一八年寮物代)

虎尾 俊哉(文甲三)

増岡 健一(理甲一)

室原亥十二(理甲三)

司会 薄田 千穂(五高記念館研究員)

(二〇一〇年三月二七日 於…五高記念館)

まず、五高を志望した理由をお聞かせください。

増岡 私は朝鮮で生まれて、朝鮮で幼稚園・小学校・中学校までいきました。それで、学校出てどうするかという時に、郷里が熊本だったんで、では熊本にある五高を受けるかということでした。我々の中学では、いわゆる上級学校に関するインフォメーションが全くなくて、どういう学校にあこが



れるとか、どこにどうだということは全然なしに、ただ単に郷里だからということでした。来てみてよかったということです。



室原 私は小国(阿蘇郡)の田舎でね。中学校は大分県の日田中でした。ただなんとなく中学に行ってみましたら、私の同級生のいとこが五高に入っていた。夏冬にかっこつけて帰ってくるんです。マントを着て帽子をかぶって。田舎の中学だったので目立ってあこがれましたね。ただそれだけです。日田中学からは一学年に二、三人五高に入っていました。



入江 僕はね。徳島県立の徳島中学。九州に知った人もいませんし、縁戚関係も何もない。ただ偶然中学校四年生の時、東大の国文科を出てすぐの人が中学校の教諭としてやってきたんですね。国文科出た人ですから国語の教諭ですね。それが五高を出てたんですね。

当時は、中学校の先生というのは高等師範学校の出身が主流だったんですが、その当時の校長がたまたま六高から東大を出てましてね。高等師範を出たのは教え方がうまいかも知れませんが目だというそういう信念で、直接帝国大学を出た人を引っ張ってくるというような方針のようでした。その一環としてその人が来たんです。その人はのちに徳島中学から大阪高等学校の教授になり、第五高等学校の国文の教授となって来ました。新制大学になってからは熊本大学の文学部国文科の教授となりました。石坂正蔵と言う人です。その人

が初任で徳島に来たんです。和辻の風土を読めとかなんとか言われました。この先生ええなあ。東大出たんだって、へええ高師ちゃうんか五高か。それでおれは五高へ行こうと。それで五高に来たんです。



古賀 私は佐賀県立の小城中学校。兄貴が小城中学校、五高を出て東大の医学部に行つたんですよ。昭和一三年だつたと思います。その兄が、「今からおれ戦争に行く、ところでお前とかく来い」ということで、ここ（五高）に連れてこられた。「俺は今から戦争に行く。おまえここに入るんだよ、五高に行つて東大

に行くんだよ。」といつて戦争へ行つちゃつた。それで何とはなしに受けなきゃいけなくなつた。それで五高を受けに来た。そしたらその年は落つこちた。それで、熊中に入つて浪人してまた受けた。熊中浪人したからよかつたんですよ。二〇〇人の中で六〇人合格した。友達がいつぱいおる。もともと佐賀には佐賀高等学校があつて、みんな佐高へ行つちゃう。でも私は五高に来てよかつたわけです。兄貴が「ここに来るんだよ。俺苦労したからお前苦労せんでいけ。」と云つて、植物の浅井先生のねノートをみんな置いて行つたんです。同じ先生がおんなじことを教えてんだから。授業内容が全然変わらない。増岡 全然変わらない。浅井先生の授業は一言一句全然変わらない。何年たつても。

室原 笑うところは笑うと書いてあつたな。(笑)  
古賀 浅井先生は五〇点以下は平気でつけるからね。一つで落第する

んだから、五〇点以下は。そういう先生だけど、講義はむかしとおんなじだから全然変わらない。五高には何とはなしに入つて、入つたら断然よかつたわけですよ。



佐川 私は熊本県の田舎でね。鹿本中学校だつた。田舎の中学は軍隊予備校だつたんですね。出来るやつは軍隊へ行くというかんじだね。その時は戦時中だからね。できるやつは陸軍士官学校か海軍兵学校を受けるということで、僕もちゃんと陸士やら受けたよ。眼鏡ではねられたけど。五高に来る人も毎年一〇人

くらいいたから、郡部の学校では優秀だつたよ。私が受けたのは、なんとなくな。そういうことで、どこへいつて何をするという大それたことは考えていなかった。けど入つてきてよかつたな。



虎尾 僕は出身の中学は長崎中学校、僕が五高を受けたのは、僕の先輩が毎年五高に入つていたからね。親しい先輩が入つたからおれも入つてやる、入れると思つて受けた。長崎中学卒業生は佐賀高校へ行くものが多かった。近いからね。みんな行つてるなら僕は行きたくないと思つた。実はその前に三高を受けようと思つたんですよ。受験よりずっと前の夏休みに京都に行った。弊

衣破帽のやつがいて、これはいいなと思つたら、平安高等予備校なんですよ。きちんと学生服を着て金ボタンつけた学生が来たから、京都大学かと思つたら、マークを見たら三高。こんな高等学校駄目だと

思った。それで、やっぱり五高にしようと思った。三高と佐高をやめて五高へ来たんです。

#### 五高と戦時について

薄田 『五高七十年史』に、昭和一八年、熊本師団兵務部長山口少将が講演・査閲で来校した際の記事が出ています。戦時期にこのような事件が起こっていたことについてはじめて知った時は衝撃を受けました。この時皆さんは三年生で五高の最上級生だったわけですが、この件も含めて、五高への戦争の影響についてお聞きしたいと思います。

#### ・禁煙寮について

入江 我々が一年生まではそれまでの高等学校の雰囲気がまだ残っていました。だから寮に入っても煙草も吸ったし自由に行動できた。二年生になってから、一年生が入って来たときに禁煙寮ということになってきて締め付けがきました。一般的な流れとして文部省から生徒課(注二)へ締め付けがあつたんだと思いますが、それが寮に波及してそういう雰囲気が、昭和一七年から出てきた感じははっきりしています。このことについて、お話しします。

私が昭和一六年に五高に入学した時、一年生は、熊本市内なんかで親元から通える人以外は全部寮に入っていた。だから殆どの人が寮に入っていたんですね。寮の惣代というのは一棟の御大で、四棟の寮に三年生の惣代がそれぞれ一人ずついた。そしてひと月ずつ交代で当番

惣代をやった。四か月たつと又当番総代が回ってくるという仕組みで自治になっていたんですね。その下に班があり二年生の班長がいる。その班長のところに五部屋、一つの部屋に二人くらいの一年生がおるとすると一〇人ないし一二人の寮生を束ねていた。

私らが一年生に入った時、三年生の惣代がおつて、二年生の班長がおるわけです。僕らが入った時には旧制高校のしきたりで、もう大人になったという扱いはいいですね。だから酒も飲むし、たばこも飲むし、ちつとも非難されない。外に出ても町の人も五高生だというと大人扱いをしてくれた。ポリさん(警察)も別にもう五高生ならむきになつてとがめはしない。そういう雰囲気が社会的にあつたわけです。一年間僕らはそういう雰囲気の中におつたわけです。

二年生になる時に一年上の人たちが惣代に、僕らが班長になった。新寮生を迎えるについての合宿を四月の入寮の前に二週間やった。そのときに惣代以下の上級生が禁煙寮にすると言い出した。寮で煙草をのませない。禁酒禁煙。

寮の建屋の中で酒煙草をのんじゃいけないという制度を作るといいました。そのとき我々は下っ端ですけど、新入生が来たなら二年生で班長にはなるわけだから、こんな場合はどうするか、いろんな質問をしたわけですが、結局行きつくところ建屋の中で飲むのはいいかん。屋外で酒を飲んだり、居酒屋行って飲んだり、外でたばこ吸ったりするのは勝手だ。だから建屋から一步出て武夫原でたばこ飲んでそれももう寮としては知らん。そういう生半可なことになった。



その当時は、教授が三人ほどで生徒課を構成して、寮は自治だといながら監督していましたね。軍の圧力のようなものがあってこういうことになって来たのではないかなあという感じを受けましたね。はあ、これはだいたい戦争のお陰でおかしくなってくるなという感じはその当時受けましたよ。でも大きな流れの中でそういう取り決めになっちゃった。そしたら案の定守らんやつが出てくるんですね。部屋の中で平気で煙草を吸う。煙がばあと出ますからすぐわかる。班長が注意せないかんということで寮の中で委員会を開く。委員会というのは班長と惣代で、月に二回いろいろな話し合いをやるのですが、そのたびに違反者がこんなに来てくると、ちゃんと守られている規則までおかしくなるんじゃないかと、こういう議論が出てくるわけですね。というのは、たとえば夜中でも便所に行く時には、部屋から出て廊下を通ってトイレに行くのに袴をはかんといかん、寝巻のままで行くのはいかんということになっていて、これなんかはきちんと従来から守られているわけですね。それでも規範がいったん崩れてくると規則なんてものは連鎖反応で、そんなものめんどくさい、袴なんかはかずにそのまま小便に行ったらいいじゃないかと言うことになってしめしがつかなくなるんじゃないかと。どうしても違反者が後を絶たなくて、委員会を開くたんびに禁煙の規則をもうやめようと、寮で煙草を昔と同じようにのんでもいいようにしようという票数が多くなっていった。そうして、とうとう私らが次の惣代になった時に解禁になった。私らが班長になる時に禁煙になって、一年やっただんですけど、三年生で

惣代になったら解禁になっちゃった。私はその時に言いました。しかたがないんじゃないかと、この現状はね。いけないいけないというながら、守っていかれないかという現実はあるのであって、制度的に元に戻すということと、戻さないけど違反の状態がしばしばあるということは本質的に違うのではないかと。けれど結局体制の流れるところ解禁になってしまった。

そしたら案の定、生徒課が乗り出してきた。おまえらでそんなこともきちんとできないのなら、お前らの自治は認めんと。その頃から、生徒課からは体育の先生とかね講師かな、寝泊まりに来ていたんですよ、でも何も言わんで一部屋に一晚寝て帰るだけだった。それが自治の権利を取り上げるといふんだよ。これでは伝統的な自治がどうなるかということ、再度それにおされて禁煙だというだらしない形になっていった。

#### ・寮の行事への影響

入江 僕らが惣代をしていた三年生の時から生徒課は年中行事の締め付けにかかった。球磨川下りをやめろ、阿蘇登山をやめろ、あんな遊山みたいなものをやっている時代じゃないとこうなってきたんですよ。これはわれわれにしてみれば伝統行事なんでね。年に一ぺんやってる。それをやめるとはと。生徒課ともやり合うわけですよ。生徒課の教授自身が旧制の高等学校を出て大先輩になるわけだ。習学寮が自治だと第五高等学校出てなくても、よその高等学校出てても、教授くらいに

なればみんな旧制の高等学校の雰囲気は知っているわけだ。球磨川下りの時も、伝統行事で自治でやっているのを物見遊山だということ言うから、どんなにしようとみんなで相談してこんな案を出した。一駅手前で降りる。そして人吉まで歩くいうんだ。一種の行軍ですわ。すると「よか」とこう来たんだよ。けれど行軍するのに下駄履いてだらだら歩くもんだから、到着時間がばらばらで晩飯の時間に皆が揃わず往生した。それに、酒も飲ませませんと生徒課に言うておきながら、先輩の酒蔵から焼酎を買って船に一升づつ配った。すると僕自ら飲んで戻れなくなった。目が覚めたらみんな熊本に帰ってもうて、付添いの二人を残して行ってしまった。帰ろうと思ってみたら、金はこいつらがみんな持って帰って熊本まで帰れへん。

佐川 ほっとけ、ほっとけ（笑）

入江 電報為替で金を送らせてね、翌日帰った。

室原 寮の行事だったからね。寮生だけだったんだらう。

入江 一年生の時は引率されて無条件でみんな行ってる。わしらが責任者になってからケチがついた。

増岡 生徒課も文部省の上の力があって言わざるを得ない。

入江 今思うと、生徒課は生徒課で文部省から言われて。

増岡 文部省は軍から言われとったんだらう。

入江 しわ寄せはこっち来るでしょう。こっちは反発するでしょう。

生徒課は生徒課で間に入って困ったんじゃないか。はさまれて。従来通りやらしてやりたいけど、なんかないかなあと。それでしょ

もない案を持ってきたのに「よか」と言ったんやろ。

佐川 文部省から甘いぞと言われたんだらうなあ。

古賀 誰かな、生徒課

佐川 田中（辰二）さん、竹原（東一）さんが生徒課だった。

入江 またこんなときにね、阿蘇登山に行ったんは良かったんや。草千里のこっちで生徒がストーム始めたんや。バスが来て、轢いて通るわけにはいかないんで、止まったわけだ。中のお客さんも観光に来ているからストームやってるのはわかって、「いよっ」って手たいたいたんだけど、バスの天井に登ってこう（踊り）やったもんだから天井がへこんじゃったんだよ。

それがね、たいへんなことになった。バスの後ろに公用車がいって、それにあの山口少将が乗っていたんだよ。とめられたバスの後ろに公用車で来てたんだよ。阿蘇の頂上に行くのは公用でも何でもなかったとおもうんだけど。何れにしろそれで走れんだったんだよ。それでこれが学生のすべきことかこうなってきた。配属将校の深草大佐へ六師団から文句が出たんだな。お前のところは何やってんだって。

バスの天井がへこんだのも損害賠償になった。バスを休ませて修理する間



の修繕費のほかに、補償金なんぼなるときたわけだ。寮は自治だから、みんなから義捐金を集めて、それは支払ったけれども、その行為自体がけしからんと怒鳴り込まれたわけやな。それが根底にあったのかどうかしらんが、その時の六師団から来た査閲官が、教練の講評の時に普通は「おおむね」とかね。ほほほめないけど、「よか」というんだけど、「あかん」とこうきたわけだ。それがどうもそれが根にあるんやないかなと、こうこちらとしては思えるわけだ。ああいうことがあったからこういうことになったのかなという、こっちはかんぐりかどうかしらんけどね。その査閲官が山口少将だということになったわけだ。

・昭和一八年査閲について

増岡 山口少将は講堂で講演をしたでしょう。そのとき我々のことを侮辱するようなことを言ったんですよ。

それで、僕はいまでも覚えとるけど、査閲の時はノモンハンの後ですからね、高いまどがあつてそれに榴弾をぶつける。済々黌（旧制中学校、五高の敷地の隣にある）との境に溝があるでしょう、武夫原（五高の運動場）の。そこで皆やとつて、目標はそこじゃなく目標はあつちと、査閲官に投げたんだよ、僕ら。そしてそれが終わつてから、あとはずっと行軍をやって帯山の練兵場まで行った。途中の道を子飼橋からずつとまっすぐ行って浄行寺通つてあの広い道通つて向こうに行くのを、あれの裏に近道があるでしょうが。藤崎さん（藤崎宮）

に出る、そこを通つた。そしたら後ろから下士官がついて来とつて戻れと。そこで戻つて、また行ったもんだから時間まで着かん。あとは走つたんや、それでみんな怒っているから、突撃したならわーとつ、そこんとこだけは元気があつてよろしいといわれたけど、講評はめちゃくちゃ。そういうことやつたんですよ。

古賀 そのあと帯山で教練中に文乙で動かなかったのがおもしろいんだよ。なんでかという論語のなんとかでむこうに煙が立っておつて、それで行くに行けないと座り込んでしまった。（四、聞取り 参照）

増岡 そういう話もちらつと聞いたよ。煙が立ってるから敵兵ありと。古賀 それで査閲官が怒つて帰つた。そこで査閲不合格ということだ。

増岡 阿蘇のバスから、ずっと積み重なつていたと思うんですよ。

古賀 講演の時も、我々をけなしたから。うしろで下駄でがたがたやつてしゃべらせなかつたからな。その時の少将が山口少将、それで帰っちゃつた。そのあと、査閲があつた。その時に今言つたようなことがいろいろ積み重なつて、最後の締めくくりは、論語だ。

古賀 いろいろ積み重なつているんだよ。

室原 その時の校長は、添野信だね。そのあと満州にとばされたよ。

入江 教練の先生は辞めさせられたね。

古賀 深草大佐ね。一八年九月だったね

室原 あの大臣は非常に理解があつたな。むこうに松林があつたな。教練の時はみんな松林の陰にひっこんでしまひよつた。日陰に。何にも言わなんだつたよね。つまり、高等学校は自由だったんだな。むかし

は中学校一年生に入ると人殺しのまねをさせよった。教練というものを。一年生からだったかな。

増岡 中学校入ったら全部教練があるでしょう。

室原 教練をやったなら、兵隊に行ったら少尉に任官させてやるという事になつてた。

虎尾 査閲の成績があるわけだ。

増岡 幹部候補生になるためにね。

室原 それをとり消されたんじゃないの。

虎尾 五高からとりあげられたんじゃないの、あのときは。

古賀 噂には聞いておつたよ。深草大佐が先輩だから、余り相手してなかつたとか、校長先生が講演に来るといふやつを「授業があつてますからそんな時間に来られたら困る」と断つたとか。授業が第一ですからということで学校として許可しなかつたことは聞いている。深草さんは山口少将の講演をやらしてくれとは言わなかつた。

薄田 講演会での山口少将の発言を覚えていますか。

増岡 内容まで覚えておらんなあ。

佐川 何を言つたかというより、話が出来んようになったことだなあ。

古賀 向こうから言わせたら自覚が足りないとか。

室原 現役の陸軍少将をやじるなんてことは、それ以上のことはなかつたんだな。

佐川 陸軍を侮辱することになるもん。

虎尾 陸軍大学校を出てね。えらいつもりだからね。それを侮辱した

ということになつたんだな。

佐川 とにかくみんな笑つたからね。

室原 深草さんはリベラルなのかな。

古賀 先輩なんだよ。山口さんの。大佐と少将だけど大先輩だからね。入江 深草さんという人は、職業軍人をやつてただけで、退役して五高に来てだぶ年数がたつから、高等学校生とはこういうものだよ。理解しているんだよ。だらけているように見えるけどやらせたらやれることについては理解を持っていた。山口さんはそういう理解が全く無くて、ボタンが外れているだけでだらしないおかしいと決めつけてしまうようなタイプだった。

古賀 調べたら、深草さんは昭和一三年からおるんだよ。昭和一八年九月まで、五年間。僕らが卒業と同時にやめた。

薄田 五高の他の配属将校は一年か二年ですので、長いですね。

古賀 我々の中学校では長くいたよ。配属将校は。

室原 県立の中学校では現役が来とつたもんね。

増岡 私の中学校では現役はおらんやつた。予備(役)だった。

虎尾 僕が入る前ぐらいには現役だったね。それまでは退役の准尉に相当するやつが来とつたのに、現役バリバリの中尉が戦争の頃来たよ。古賀 私はその前に中学校を卒業したもんだからうるさいのがいなかった。よかつた。

虎尾 この話はあとがありましてね。山口少将は次の年に東大に査閲に来た。その時、「熊本の某高等学校では、」と言つたんですよ。熊本

に高等学校は一つしかない。

佐川 あなたは二度山口少将に会った？

虎尾 僕は直接聞いてないが、法学部の連中が聞いていた。

古賀 十八年会では桑先（政男）がおった。うち（理甲二）の弓（盛年）もおつたらしい。田（英夫）もおつて、お前の高等学校じゃないかと言われた。山口少将を誰も相手にせず、わあわあ言うたらしい。東大だからまじめに聞いてない。あとの話でいうと、たたりがあったわけだ。査閲の不合格の結果、兵隊に行つて予備士官になれずに苦労した人が多い。五高ということだ。

佐川 我々は影響なかつたけどな。

古賀 今みたいに全部連絡が行くわけじゃないから、ある特定のところに影響というわけでしょう。満州とかね。

佐川 山口少将の話は有田が一番詳しい。（四、聞き取り 参照）

#### ・部活動への影響

室原 インターハイは一七年まであつたかな。

佐川 一七年まではあつたかな。一六年はとりやめ、

入江 はっきり覚えているのは、おれが三年生のとき。一八年旧制高等学校のインターハイにむけて、三年生はメンバーに入らないで二年生以下でやるんだとしていたら、先輩がやってきて怒鳴りつけられた。何を言うтонじゃ。三年生も入れてチームを編成してちゃんとやらにゃあかんやないか。大学について調べたら、去年京大が法学部定員

割れで無試験。それで東大への願書をとりさげて京大に出した。そして柔道を一生懸命練習した。そうしたら鉄道輸送の関係でインターハイ中止や。やらへんちゅうんだから。前年は東大に行つて試合もやった。これで練習したのが空振り、願書の取り換えもできない。それに京都大学は定員オーバーで試験があることになった。大慌てで試験受けに行つて、それで落ちたやつもいるんや。あれでひどい目におうた。

佐川 インターハイは三年の時はなかつたね。一年の時（昭和一六年）も、何でなかつた？

室原 やはり大東亜戦争の準備してたからな。

佐川 まだ始まつたわけじゃなかつたけど。

室原 電報が来たよ。電報が来て中止になった。けど合宿はやった。

佐川 結局二年の時だけだね。インターハイがあつたのは。

最後に五高生活で心に残っていることを一人ずつお願いします。

虎尾 先生がたについてのちよつと評論みたいなものをやります。実は僕も今先生をやつてるものだから。僕が高等学校の先生になりたいとある人に言つたんですよ。そしたらその人は、志が低いと言つた。東大の教授になりたいと言うならわかると思つたんだろうね。でも僕は、高等学校の先生ぐらい面白いものはないと思つていた。

一和田さんという英語の先生は名簿の五人ごとに当てていくんですよ。最後に當つた人の次の五人目が次の時間、来週にあたる。ある時、五番目にあたるはずで来なかつた人がいたんですよ。或る生徒があつた

た。先生はちゃんと予習をしやすいようにやってくれたと思うけどね。「私は順番ではありません」と言っただけです。(笑)その時は烈火のごとく怒ったんですよ。

河瀬さんという英語の先生には、チェスタートンと言う人の評論を教えてもらった。その中の *black and white* と言うのを、先生が「くろしろ」と訳したんですよ。僕はなんとかしてこの先生をやっつけてやろうと思って、「はいっ」と。「先生、日本語では『くろしろ』と言ういません。『しろくろ』と言います。」って言ったらね、「虎尾君、『くくびやく』と言うでしょうが」。先生は「くろしろ」と言っただけで、「くくびやく」と言わなかったんだからね。全員四〇人わくと笑って、僕はそれ以上言えない。そういうような一気にひっくり返されて、こっちは悔しいんだけどそれ以上太刀打ちができない。これは高等学校の先生は偉いもんだと思っただけ。



それから、山田先生と言う英語の先生。この人はね。教室にきたら、窓の外を見たりしているんですよ。いつまでも出席をとらないんですよ。そして一言「暑いね」。三分から五分たつてからだ。それはいいんですよ、こっちも、進まないほうがいいからね。(笑)そのころ喫茶店のガルボというのがありました。ある時、ガルボに仲間の生徒三人でいたら、山田先生がめずらしくはいつて来られたんですよ。そして僕らの席に座られた。ストローが袋に入っているでしょう。そ

れになにか横文字が書いてあった。「これ、意味がわかるかね」と言われた。なにか書いてあるがわからない。書いてあるとも思わなかったんだけど。「これは、『消毒済み』という意味なんですよ」というような具合で……。「ついでに、君たちはコーヒーを飲んでいるけど、紅茶のことはミルク紅茶と日本語で言うけれど、英語ではティーウイズミルクと言うんだよ。ミルクティーとは言わない。」と言われた。それから何十年後に僕がロンドンに行つて、或る古めかしい喫茶店に入つてメニューを見たら、ちゃんとミルクティーがあるんですよ。二十何年たつて世の中が変わつたのか、日本英語が日本から逆輸入されたのか、それとも山田先生の一知半解だったのか。そういう非常に面白い先生。しかし、きちんとしたことを教えようとする。喫茶店でまで英語教えたんだからね。そういう先生がいた。ということだけ申し上げておきます。

佐川 山田さんは「あつよいよ。」時々、入ってきてしばらくして「眠たいね。」と言つてたね。一番最初の発声がね。二分か三分してね。

虎尾 そういう調子だった。

古賀 山田先生が五高に来たのは昭和一五年だね。五高を昭和四年に卒業している。

虎尾 まだ東大を出てちよつとというくらいだね。

室原 たしかに、教授は非常に人格的に面白い先生が多かったですよ。山田先生とか、和田さんとか、とても面白い先生だった。学問的には高等学校ではさほど印象には残ってないですね。ただ大学に変わつてか

らは知らんですが。そういう印象ですね。人柄というか人格というか、今でも感銘受けていますな。和田さんとか河原畑さんとか。

佐川 私はやはり、韓国から来たつた生徒が心に残っていますね。李源京、韓国の外務大臣になった。それと蘇尚永ね。この前話したことだけ。(注二)

虎尾 李源京ってトップだったね。

佐川 卒業してからのね。ずいぶん、いい付き合いだよ。

室原 韓国・朝鮮から学生入っていますよね。あれは選抜されて来たつたのかね。

虎尾 普通に入学試験受けてちゃんと入っているんですよ。李源京は偉い人だったね。外務大臣になってその後辞めてから駐日大使になってきて、おとし死んだな。

古賀 五高の時は西岡と言ったんだよ。おれ西岡と同じ下宿だったんだよ。子飼橋の。あれホッケーしよったんだよ。東大に入ったけど、ソウル大学に出たんだよ。あれはすごいよ。大使で来たでしょう。目的は何か、大統領を日本に連れてくる。芯がしっかりとしているんだよ。とうとう彼の時、韓国の大統領を初めて日本に連れてきた。

彼は夜一時間になると私個人の仕事をやる、と友人だった五高の同級生に電話する。来た時に歓迎会やった。出る時も歓送会やった。

室原 当時、悩みあったろうな。彼は。

佐川 分らなたいね。あつたはずだよ。韓国人と思わなかったもん。名前が西岡だったからね。一年の終る頃まで知らなかった。

増岡 創氏改名で名前が変わつたつた。

古賀 僕は、五高に入つたら田舎もんだから、カルチャーショックですよ。英語が一〇数時間、独逸語が一〇時間弱、外国語なんですよ。

これびっくりだよ。独逸語はABCから教えるかと思うたらそうじゃないんだよ。時間表通りに木曜日に何かあつたらそこからスタートするわけだ。独逸語のABCから始めな。独逸語の一番先がドルさんなんだよ。ABCも何も知らないところへ、英語でべらべらというわけだよ。独逸語の授業だけど説明を英語でしてくれるわけや。英語せんなら独逸語わからんからね。でもいきなり独逸語わかりつこないよね。文法の本も何も読んでいないのに。こつちはよろこんで独逸語の先生とかいつたら、いきなりだよ。でも内容はローレイだったんだ。おれ知つてるもんだからパツパツと訳したんですよ。するとそこまで聞いてないと言われた。半分しか聞いとらんと言われた。

佐川 聞かれとらんとこまでやった。

古賀 もう赤面じゃあるけど。本当に五高であかぬけたね。寮に行つたら本でしょう。理科だけど文科の本とか、哲学書を読まされる、寮生活やって寮で一カ月一ヶ月には人間が変わつたような感じね。阿蘇歩いて行くし、球磨川行くでしょう。太鼓をやるでしょう。すっかり人間が変わつたという感じ。一日が長いわけでしょう。授業があつて、運動やるでしょう。飯食つたら、喫茶店にいかないかんでしょう。毎晩。寮に帰ってくるのは九時か一〇時。映画も見にいかないかん。義務なんです。そうしないと一人前に扱わんのやけん。映画見て、

議論できなきや一人前に扱わんのやけん。本も読まないかんでしょう。一週間に一冊は買わないかん。岩波文庫をね。一週間に一篇読まないかん。読まにヤコンパができない。晩飯食いに行くでしょう。それから自分の時間。一日が長いわけですよ。今では考えられない。授業やって、運動やって、遊びに行つて、寮歌の練習やって、コンパやって、飯食いに行つて、それから自分の勉強。

室原 二年半の栄養があなたの糧になつとるな。

古賀 二年半じゃなくて寮の一年が私の人生。昨日も五高に来て、門からここまで一時間かかった。変わつたらんもんね。サインカーブは

入江 高等学校生活は、寮と柔道部だけですわ。柔道部はもとから入るつもりはなかつたんですよ。僕は陸上競技でちよつと丘の上でおひさまにあたつて、円板とか砲丸とか投擲をやるうと思つていたんですよ。そしたら、柔道部の先輩が寮の部屋にやつてきてね。ひとつしかない出入口のところにあたむろして。僕はたまたま初段を持つて黒帯だった。黒帯持つてるやつが柔道部はいらんてはない。おまえみみたいなやつ陸上部へいってもスパイクもないぞ。足は大きいし、と言つて、とにかくねばつてねばつて飯の時間来てるのに、飯食いに行けないわけだ。しょうことなしに柔道部に入れられたみたいになつてね。入つたらしょうがない。寮に残れというのも柔道部の先輩の命令でね。お前は寮に残れ、新入の柔道部員を道場に連れて行くのが役目ということで、わしは寮に残つた。

放課後はすぐ道場へ行つて、やつて晩飯の時間まで練習するでしょ

う。風呂入る時は汚い終り頃の風呂へはいつて、二度めし(注三)に会うたりしたら、飯がなくなつていたりしてね、外へ食べにいかんとしゃあないやないか。そんな予習復習なんてものはもううたくたになつてゐるし、でけへんしね。寮に戻つたら、委員会があるや何やがある。部活動が終わつてから六時か七時から委員会が始まるしね。この二つやつたらもう精一杯で、授業にでて、部活やつて寮のことやつたら一日終りですわ。勉強は何もせん。当てられてもなんも答えも何もでけへん。特に新しい課目の独逸語は特にあかんでした。

二年生から三年生への進学の時低空飛行でね。しかしね、世の中に出てから、やつぱり高等学校行つてて良かったといふことはいろんな場面ではしばしばあつたね。勉強はあまりしなかつたけど。五高に来て、寮におつて柔道したといふことは、僕は非常によかつたなと思ひます。

室原 私はボート部なんですよ。島原遠漕だ。全国五高会報に書いてあるから(注四)。詳しく。ボート部のことは、だいぶ書きました。

島原 行つたらね。遭難しかかつてね。ようしたもんで、どこそこに先輩がいるんですよ。その日は天候が悪くてね。漁師さんから絶対今日はでなさんなと忠告されたけど、誰だったかな。豪傑、天神ひげの  
佐川 清田、清田

室原 清田というのがおつてね。こんくらいなら出て行けと云うもんで、みんな、やつぱこわかつたけど。出ていつて。

佐川 そのときは心配したよ。土曜から行つて日曜帰つてくる筈だつ



たんだろ。月曜日にいったら学校出て来とらんもん。うちのクラスの清田やら。ボートは海が荒れとるのに出たという話だけ通知がはいってただけで、こつち着いたか着かんかぜんぜんわからん。島原出てるが、まだ熊本着いとらんという。どつか流されたか、沈んどるか、こらやられたな、つてね。たいがい心配しとった。

室原 あれがエピソードと言えば、エピソードね。島原遠漕の遭難。

佐川 遭難しかかった。半分の遭難だよ。あれ。

室原 ボート部の艇庫のマークは永遠に残してください。(注五)

増岡 僕は五高で寮に入ったということね。一つの班に文科理科文科理科と言う具合に半々いたわけよ。そういうことで、僕は理科で入ったんだけど、ものすごく本を読みましたよ。それと文科の人といろいろ話をした。今から考えてみますと、五高は理科がよく本を買って読んでね。文科が天文学やとか理科的な本を読んできるとい感じを受けた。寮に入って文科の人と一緒にやったということがそれが一番自分の肥やしになっているような気がする。

それともう一つは映画に毎晩行きました。その当時は戦争中ですから映画行ってパンフレットといつても一枚くらいのやつしかありませんよ。それを買ってね、ちよどミカン箱いっぱい寮にたまつて、そして朝鮮ですから、疎開の意味で朝鮮へ送った。で、引き揚げてくるときに、うちはおやじが商売しとったもんだから、闇舟を雇って、そのしょうもない映画の時にはいったときにもらったパンフレットを全部持って帰って来てくれた。それが今もあります。結局田舎でそういう



で、同室におるもんがあきれてしもうて。とにかく部活が終わって飯食ったら、すぐげた履いて飛んで行って映画を見て、帰ってきて本読んで寝るといようなことが一番印象に残ってますね。試験がある時もそうですよ。映画見に行つて、帰つてすぐ寝て、三時頃起きてちよこちよこことうええかげんにやつて、まあ何とか三年卒業しましたけども、だいたいそういうことが非常に残っています。

古賀 映画はほんとうに見に行かないとあかん。コンパの時に映画見とらんと恥かくよ。

佐川 いまの子供がテレビ見て、話すようなものでね。

古賀 映画の洋画はまだあったもんね。

増岡 映画はまだ一二月の八日まではアメリカ映画もあったもんね。それからドイツ映画だけが入つて来んようになった。

虎尾 フランス映画も入ったね。フランスが負けてからさ。

増岡 トーキョーになったというやつをはじめて中学の時みたよ。

虎尾 教授も映画批評かなりやったね。和田さんは、一時間潰してやるんですよ。

佐川 生徒が映画の名前を黒板に書いていると、ちらっと見て、機嫌がいい時は、「僕も見ましたよ。」としゃべりだして、一時間やつてる。

十八年会について

古賀 こういうことは言えるよ。一八年卒業が、旧制高校らしい生活だった。それで、一八年九月卒業の筈が、もう少し高校生活をエンジョイしたいと意識的に落ちた人がいます。落ちたら勤労働員ばかり

でなんも役立たなかった。落ちただけ損じやったという人が文乙でいるよ。一年落ちたけど何もならんだつたと。

一八年の入学（注一）までは文科理科同じ一六〇名くらいなんです。そのあとは文科理科の人数が変わっている。理科が多くなっている。最後になって文科は一クラスか二クラスになる。理科ばかりになる。それでね、我々文科理科同数でしょう。十八年会というのは文科理科合同

のクラス会をずっとやってるわけですよ。そのほかは、文科理科合同というのはない。一二〇周年記念事業をやった時、東京五高会の五、六人の実行委員の中で、「一八年はすごいですね」と言われるわけですよ。僕らあたりまえなんですけどね。理科は理科だけで文科の人とは会ったことはないというんです。そのくらい一八年というのは、強いつながりがあるんだ。本当の高等学校の生活という意味で最後だったからね。多い時は東京で二〇〇人集まっていました。今も毎年やっています。東京・熊本・京都順番にね。そういうクラスはないんです。（以上、括弧内は編集者）

（注一）事務部の一課。生徒の取締、習学寮の警備、衛生、監督に関すること等を分掌した。昭和一六年、一七年には竹原東一、田中辰二、小山直之、一八年には竹原、小山、高森良人が生徒課主事を務めている。いずれも教授である。

（注二）佐川氏には座談会に先立って聞き取りを行った。その際、留学生について次のような話があった。

「私のクラスに韓国から留学してきた人が二人いました。李源京と蘇尚永。李君は韓国の外務大臣になって、そのあと駐日韓国大使をした人です。僕らなんか一年が終わるまでは韓国から来ているとは知らなかった。名前が変わっていたからね。あの人たちにとっては大変屈辱的なことだけだね。だから一年生が終わる頃知りました。その時も『彼は韓国から来たてたい。』それでおしまい。学校の時も我々は全く壁なんて感じなくてね。朝鮮人だというやつも誰もいないしね。後から考えても、ごく自然に付

き合いできたからね。あの人たちが自身にはいろいろな点で屈辱的なことがあったかもしれませんが、学校にいけばみんなといっしょにしてくれ  
ることは助けたたかもしれません。どんなに偉くなっても、日本に来  
たら連絡があるし、外務大臣の頃に韓国の慶州に呼んでクラス会もして  
くれた。本当に分け隔てなく、在学中も勿論だけど、卒業してからもね。  
五高時代は良かったなという思い入れがあったんだと思いますね。そう  
いう良さが五高だからあったのかなと今思ってますね。あの人たちがおた  
おかげでうちのクラスはバラエティがあつてよかつたなと思う。卒業し  
てからも俺は韓国で偉くなったからということは全くなくて、日本に来  
たら五高時代に帰ってね。楽しい思い出をくれたような気がします。」

(注三) 一度夕食をとったものが時間をおいて再度夕食を食べること

(注四) 昭和一七年九月の半ば、ボート部が二艇で島原遠漕に出たとい  
うエピソード。漁師から「学生さん今日は漕がんほうがよかよ」と注意され  
たが、文甲三の清田誠氏の号令で漕ぎ出した。悪天候のため島原の漁船  
に誘導されて島原に入港し、島原で医院を開業していた大正八年医卒の  
伊東一生氏の歓待を受けた。翌日帰途に就いたが、何人かが腹痛と下痢  
を訴え、対処しつつ江津湖まで帰りついた。詳細は「龍南短艇部秘話 二、  
黄金色の航跡」『全国五高会報 第九七号』所収

(注五) ボート部の艇庫は江津湖畔にあったが取り壊され、取りつけられ  
ていた校章の部分が五高記念館に保管されている。

(注六) 旧制高校の入学者数は、定員があるのも関わらず、毎年一定してい  
ない。それには次のようなシステムが影響している。たとえば文科乙組  
の募集定員四〇名に対して昭和一六年四月の入学生は三五名であった。  
この年は五人が落第して上の学年から降りて来たので、この分を差し引  
いて三五名の入学となる。同じようにこの年の文科甲三は二名落第して

来たので、定員四〇名に対して三八名の入学となる。要するに一教室の  
四〇名をきちんと守っていたのである。

写真47 P 阿蘇登山バス事件（昭和一九年理甲三 渡邊信一氏寄贈）

写真51 P 英語教授山田昌司先生（昭和一八年文甲二アルバムより 緒方秀

逸氏寄贈）

写真54 P 映画「白鳥の死」（昭和一七年九月卒文甲二アルバムより 秋田成

就氏寄贈）

写真55 P 五高十八年会 平成二二年三月二七日 五高記念館前

## 六、史料

本項では考察の材料として、昭和期の五高関係年表、学科課程、教授時数表、軍肩書所持教員一覧、配属将校一覧を掲載する。

### (一) 年表 『五高五〇年史』『五高七〇年史』より作成

- 昭和二(一九二七)年  
二月一日 大正天皇大葬にともなう遙拜式が行われる。
- 昭和三(一九二八)年  
二月二〇日 第一六回総選挙(最初の衆議院普通選挙)  
四月 第一三臨時教員養成所に国語漢文科が増置される。  
八月 熊本市が五高構内へ水泳場を築造し、五高に寄付  
一〇月九日 御真影が下賜される。  
十一月二〇日 昭和天皇即位の奉祝式並びに提灯行列が行われる。  
二月 教育に関する御沙汰書下賜  
ラグビー部を編入し、翌年其の独立を認める。
- 昭和四(一九二九)年  
五月 御大礼記念館竣工(職員生徒寄付)  
八月 図書教室並びに新教室の二棟を東方に移転し、その跡地への講堂新築に着手
- 一〇月二四日 ニューヨーク株式市場大暴落、世界恐慌はじまる  
哲学読書会設立
- 昭和五(一九三〇)年  
三月 講堂落成  
寄宿舎の第四寮の内部を改造して、室数を増加する。  
十一月 銃器庫増築工事に着手、同年一二月落成  
弓術部を弓道部と改める。
- 昭和六(一九三一)年  
一月二〇日 九代校長武藤虎太任命  
九月一八日 柳条湖事件おこる。(満州事変勃発)  
一月三日 校旗制定  
一月二五日 昭和天皇、陸軍特別大演習の際に行幸  
排球部、馬術部創部。音楽部を公認し、翌年独立を認める。
- 昭和七(一九三二)年  
三月一日 満州国、建国宣言を発表  
三月三日 第五高等学校同盟休校発生(一二二日)、大量の処分者出る。  
三月三一日 一〇代校長十時弥任命  
三月 第一三臨時教員養成所廃止  
五月一五日 五・一五事件  
五月 寄宿舎構内に仰光館(行幸記念)新築
- 昭和八(一九三三)年  
三月二七日 日本、国際連盟脱退  
三月 特待生規程廃止
- 昭和九(一九三四)年  
二月一日 科学同好会発会
- 昭和一〇(一九三五)年  
二月二三日 哲学研究会発会
- 昭和一一(一九三六)年  
二月二六日 二・二六事件  
九月 寄宿舎食堂一部の改築によって第二生徒控所落成  
十一月 寄宿舎食堂落成
- 昭和一二(一九三七)年  
四月 寮生集会所新築知名堂、生徒集会所改築終諾堂と称する。  
七月七日 盧溝橋事件(日中戦争始まる)  
一〇月一〇日 開校五〇周年記念式典を挙行する。  
二月九日 開校五〇周年記念館新築竣工

二月三日 南京事件

ホッケー部公認、翌年独立

昭和二三(一九三八)年

四月一日 国家総動員法公布

八月三〇日 菊池郡花房村に新設する陸軍飛行場で、職員生徒が五日間除桑作業を行う。

昭和三四(一九三九)年

五月二〇日 花房飛行場の整地作業に職員生徒が五日間従事する。

六月一八日 断髮敢行

阿蘇道場の建設工事に全校職員生徒が従事

昭和三五(一九四〇)年

一月一〇日 一代校長添野信任命

二月一日 阿蘇道場の贈呈式(同窓会より五高へ)、九月二二日開場

五月二八・二九日 東光原一部の開墾、稗植付

九月二七日 日独伊三国軍事同盟調印

九月二八日 習学寮生慰問袋五〇個を連帯区司令部に献納

一〇月二日 大政翼賛会発会式

十一月一〇日 紀元二千六百年奉祝式典、熊本県下各地で開催

十一月二日 龍南会を改称して、龍南学徒報国団とする。

昭和一六(一九四一)年

一月一七日 新寮生誓詞が定められる。(四月五日掲額式)

五月四日 ポートレースを傷病兵五〇〇余名が観戦

九月一七日 学徒報国団特設隊編成

九月二二・二七日 全校で陸軍射的場設置の土木作業に従事

十一月一八・二〇日 二、三年生は鹿本郡山内村外四箇村、一年生は飽託郡供合村で奉仕作業へ従事

十二月八日 ハワイ真珠湾攻撃、米英に宣戦の詔書(太平洋戦争始まる)

十二月八日 対米英宣戦布告に関する詔書の奉読式を行う。

昭和一七(一九四二)年

三月二四日 三年生会議において禁煙決定

三月三〇日 臨時措置により第三学年は九月三〇日に修了することになる。

五月二日 阿蘇登山のバス事件

六月二・四日 一、二年生往復徒歩にて飽託郡川上・西里村に麦刈作業

一〇月三日 学生狩り

昭和一八(一九四三)年

一月二〇日 高等学校令が改定され、昭和一八年四月から二年課程となる

六月三・五日 一、二年生飽託郡供合村、広畑村で麦刈作業

六月二八日 査閲後、配属将校転属

九月八日 イタリア無条件降伏

九月二二日 学徒出陣の命下る。

九月三日 阿蘇郡山田・内牧他三箇村で稲刈り作業

一〇月三日 文科生出陣壮行会

十二月一日 学徒出陣

阿蘇・球磨・天草三郡へ土地改良作業

一年生全員が強制的に入寮、文部省の修練要項が実施される。

野球が全面的に禁止される。

昭和一九(一九四四)年

五月一日 生徒寄宿舎第四寮の増築竣工

五月二五日 理科三年生は長崎造船所へ、文科三年生は一六日より八幡製鉄所へ、勤労働員

六月一・七日 八代郡千丁村・文政村、飽託郡川口村で農作業

七月二日 文理科一年生、八代市で田植え作業

七月二四日 文科二年生長崎へ動員

九月一日 十二代校長本島一郎任命

九月六日 理科二年生佐世保海軍工廠へ動員

一〇月一・八日 健軍飛行場へ動員

一〇月一・二六日 佐賀県下へ農耕作業動員

一〇月三〇日 一二月三日 八代郡鏡町外四箇村へ稲刈り動員  
一二月二八日 五高在郷軍人会結成

昭和二〇(一九四五)年

一月二〇日 文科一年健軍三菱航空へ動員

三月一〇日 東京大空襲

三月一八日 「決戦教育措置要綱」閣議決定、四月一日より一年間原則として授業停止、学童疎開の強化を指令

四月四日 本館階下、武道場、理科実験室、同窓会館西側教室が工場化

四月一日 理科甲類二年生一〇〇名長崎へ、その他は健軍飛行場へ動員

七月一日 熊本市大空襲

七月七日 入学・入寮式

七月八日 学徒義勇隊結成

八月五日 理科甲類一年生小倉造兵疎開工場へ動員

八月六・九日 広島・長崎に原爆投下

八月一五日 ボツダム宣言受諾を発表

九月二〇日 終戦の詔書下る。生徒を訓諭し、三日間臨時休業する

九月二〇日 授業再開

一〇月二日 軍系学徒転入試験

一〇月五日 占領軍第一陣二八〇人が上熊本駅に到着

十一月二日 運動会開催

昭和二一(一九四六)年

一月一三日 御真影奉還のため、教授浅井東一等上京

三月一日 龍南学徒報国団を解消し、元の龍南会に復する。

五月四日 文部省令第一八号により、高等学校は本年四月一日より三年課程に復する。

六月一五日 ボートレース再開

七月一四日 五高対七高野球戦が二〇年ぶりに復活、一二対一で五高

九月七日 外地転入学生試験

九月 寮生誓詞、三綱領復元

一〇月一〇日 二週間食糧休暇

一〇月二日 教員適格審査協力委員選挙、一八日委員会成立

十一月三日 日本国憲法公布

協生会・柏葉会・社会研究部発会

習学寮、四寮制となる。

昭和二三(一九四七)年

一月三二日 生活課を解消し、生徒課並びに厚生課を置く

三月二九日 教育基本法公布

一〇月一〇日 六〇周年記念式

評議員会解消、熊本大学法文委員会発足

昭和二三(一九四八)年

三月二二日 五高最後の合格発表、第一高女から四人合格。初の女子五

高生

五月三二日 一三代校長竹内良三郎任命

昭和二四(一九四九)年

三月 第一学年は三月を以って修了となる

五月三二日 一四代校長河瀬嘉一任命

五月三二日 熊本大学へ包括される。

九月一日 熊本大学第一回入学式

昭和二五(一九五〇)年

三月二五日 第五高等学校課程終了式挙行

三月三二日 河瀬嘉一、熊本大学教授に任ぜらる

龍南会解消

習学寮解散

(二) 学科課程・教授時数表

1、昭和六年度学科課程・週教授時数(昭和二六、二七年「第五高等学校一覽」)  
文科

学科目/学年	第一学年	第二学年	第三学年
修身	一	一	一
国語及漢文	六	五	五
第一外国語(英語)	九	八	八
第二外国語(独語)	(四)	(四)	(四)
歴史	三	五	四
地理	二		
哲学概説			三
心理及倫理		二	二
法制及経済		二	二
数学	三		
自然化学	二	三	
体操	三	三	三
計	二九(三三)	二九(三三)	二八(三三)

第一外国語ヲ独語トシタル場合ニ於テハ各学年ニ於ケル第一外国語ノ  
毎週教授時数ハ左表ニ依ル

学科目/学年	第一学年	第二学年	第三学年
第一外国語(独語)	一一	一〇	一〇
第二外国語(英語)	(三)	(三)	(三)
計	三一(三四)	三一(三四)	三〇(三三)

第二外国語ヲ修メサル者ニ対シテハ其ノ教授時数ヲ便宜他ノ学科目ニ  
配当スルコトアルヘシ

理科

学科目/学年	第一学年	第二学年	第三学年
修身	一	一	一
国語及漢文	四	二	
第一外国語(英語)	八	六	六
第二外国語(独語)	(四)	(四)	(四)
数学	四	四	四(二)
物理		三	講義三、実験五
化学		三	講義三、実験五
植物及動物	二	二	講義二、実験四
鉱物及地質	二		
心理及地理		二	
法制及経済	二		
図画	二	二	(二)三
体操	三	三	三
計	二八(三三)	二八(三三)	二八(三三)

第三学年ノ数学(二)及図画(二)ト第三学年ノ植物及動物講義(二)  
実験(二)トハ生徒ヲシテ其ノ一ヲ選択セシム  
但昭和六年以降ノ入学者ニハ之ヲ適用セス  
第一外国語ヲ独語トシタル場合ニ於テハ各学年ニ於ケル第一外国語及  
第二外国語ノ毎週教授時数ハ左表ニ依ル

学科目/学年	第一学年			第二学年			第三学年		
	第一学期	第二学期	計	第一学期	第二学期	計	第一学期	第二学期	計
第一外国語(独語)		一〇			九				九
第二外国語(英語)	(三)		(三)	(三)		(三)			(三)
計	三〇(三三)		三〇(三三)	三一(三四)		三一(三四)			三一(三四)

第二外国語ヲ修メサル者ニ対シテハ其ノ教授時数ヲ便宜他ノ学科目ニ配当スルコトアルヘシ

2、昭和一七年度学科課程・学期教授時数(昭和一七、一八年「第五高等学校一覽」)

学科目	第一学年		第二学年		第三学年	
	第一学期	第二学期	第一学期	第二学期	第一学期	第二学期
道義科	三〇	三〇	三〇	三〇	三五	三五
古典科	六五	六五	六五	六五	三五	三五
歴史科	五〇	五〇	六五	六五	五〇	五〇
経国科	三〇	三〇	三五	三五	三五	三五
哲理科	三〇	三〇	三五	三五	二五	二五
自然科	五〇	五〇	三〇	三〇		
外国語科	九五	九五	九五	九五	七〇	七〇
体錬科	八〇	八〇	八〇	八〇	六〇	六〇
計(時数)	四三〇	四三〇	四三五	四三五	三一〇	三一〇
第一演習	二四	二四	三二	三二	三〇	三〇
第二演習(外国語科)	三二	三二	二四	二四	二八	二八
計(回数)	五六	五六	五六	五六	四八	四八

備考 演習一回八二時間ヲ以テ基準トス

理科

学科目	第一学年		第二学年		第三学年	
	第一学期	第二学期	第一学期	第二学期	第一学期	第二学期
道義科	三〇	三〇	三〇	三〇	三五	三五
古典科	五〇	五〇				
数学科	一一〇	九五	九五		(七〇)	
理化学科		五〇	九五		七〇	
博物科	六五	五〇	三五		(二五)	
人文科	五〇	三五	五〇			
外国語科	九五	九五	九五		七〇	
体錬科	八〇	八〇	八〇		六〇	
計(時数)	四八〇	四八五	四八〇	(四四五)	(三〇五)	
第一演習(理化学科)			一六		三六	
第二演習(博物科)	一六	一六			(二四)	
第三演習(外国語科)	一六	一六	一六		一一	
計(回数)	三二	三二	三二	(六四)	(四八)	(七二)

備考 一、第二学年第二学期及第三学年ニ於ケル数学科(一一〇)、(七〇)ト数学科(六五)、博物科(二五)、(二五)及第二演習(二六)、(二四)トハ生徒ヲシテソノ一ヲ選択セシム

二、演習一回八二時間ヲ以テ基準トス



3、昭和一八年度学科課程・年教授時数（昭和一八、一七年）〔第五高等学校一覽〕

文科

学科目/学年	第一学年	第二学年
道義科	三五	三五
古典科	二〇〇	二〇〇
歴史科	一六五	一六五
経国科	六五	一三〇
哲学科	六五	六五
自然科学科	六五	六五
外国語科	二〇〇	二〇〇
教練科	一〇〇	一〇〇
体錬科	六五	六五
撰修科	一六五	一〇〇
合計	一、一二五	一、一二五

理科甲類

学科目/学年	第一学年	第二学年
道義科	三五	三五
人文科	一三〇	六五
数学科	一三〇	一三〇
物理学科	一三〇	一〇〇
化学科	一〇〇	一六五
博物科	三五	六五
外国語科	三〇〇	二〇〇
教練科	一〇〇	一〇〇
体錬科	六五	六五
合計	一、一二五	一、一二五

理科乙類

学科目/学年	第一学年	第二学年
道義科	三五	三五
人文科	一三〇	六五
数学科	二〇〇	一〇〇
物理学科	一〇〇	一六五
化学科	一〇〇	一六五
博物科	一三〇	一六五
外国語科	二六五	二六五
教練科	一〇〇	一〇〇
体錬科	六五	六五
合計	一、一二五	一、一二五

(二) 軍肩書所持教員一覽

年度	五高肩書	軍肩書	氏名	担当教科	備考
明治21年	嘱託教員	退職陸軍歩兵大尉	川上親賢	体操	
	嘱託医	退職陸軍一等軍曹	奥村一隆		
明治22年	嘱託教員	退職陸軍歩兵大尉	川上親賢	体操	
明治23年	嘱託員	退職陸軍歩兵大尉	川上親賢	体操	教員
明治25年	教授	陸軍一等軍医	吉田健康	内科学、内科臨床実習	医学部主事
明治26年	教授	陸軍一等軍医	吉田健康	内科学、内科臨床実習	医学部主事
明治27年	嘱託員	陸軍歩兵大尉	沼田九八郎	体操監督	
	嘱託員	陸軍歩兵大尉	沼田九八郎	体操監督	
	教授	陸軍一等軍医	吉田健康	内科学、内科臨床実習	医学部主事
明治28年	嘱託員	陸軍歩兵大尉	沼田九八郎	体操監督	
	教授	陸軍二等軍医正	吉田健康	内科学、内科臨床実習	医学部主事
明治29年	嘱託員	陸軍歩兵大尉	沼田九八郎	体操監督	
	嘱託員	陸軍歩兵少尉	嶋野四平	体操	
	教授	陸軍二等軍医正	吉田健康	内科学、内科臨床実習	医学部主事
明治30年	嘱託	陸軍歩兵大尉	沼田九八郎	体操監督	
	嘱託	陸軍歩兵少尉	二宮哲三	独逸語	
	嘱託	陸軍工兵少尉	嶋野四平	体操	
	助教授	陸軍歩兵少尉	加治木栄太郎	体操兼学寮掛	医学部在勤
明治31年	嘱託	陸軍歩兵大尉	沼田九八郎	体操監督	
	嘱託	陸軍歩兵少尉	二宮哲三	独逸語	
	嘱託	陸軍工兵少尉	嶋野四平	体操	
	嘱託	陸軍歩兵少尉	緒方武	体操兼学寮課詰	
	嘱託	陸軍歩兵少尉	横田五郎	教務課詰	
	助教授	陸軍歩兵少尉	加治木栄太郎	体操兼学寮掛	医学部在勤
	助教授	陸軍歩兵少尉	山口律造	体操兼学寮掛	医学部在勤
明治32年	助教授		嶋野四平	体操、学寮主任	工学部大学予科体操科主任心得
	助教授		横田五郎	教務課詰	兼書記
	嘱託	陸軍歩兵大尉	沼田九八郎	体操監督	
	嘱託	陸軍歩兵少尉	二宮哲三	独逸語	
	嘱託	陸軍歩兵少尉	緒方武	体操兼学寮課詰	
	助教授		加治木栄太郎	体操兼学寮掛	医学部在勤
	助教授		山口律造	体操兼学寮掛	医学部在勤
	助教授	陸軍工兵少尉	嶋野四平	体操、生徒課主任	工学部大学予科体操科主任心得
明治33年	助教授	陸軍歩兵少尉	横田五郎	教務課主任心得	
	嘱託	陸軍歩兵大尉	沼田九八郎	体操監督	
	嘱託	陸軍歩兵少尉	二宮哲三	独逸語	
	嘱託	陸軍歩兵少尉	桃野常八郎	体操、生徒課詰	
	嘱託	陸軍歩兵少尉	田副正人	体操、生徒課詰	
	助教授	陸軍歩兵少尉	加治木栄太郎	体操兼学寮掛	医学部在勤
	教授	陸軍歩兵少尉	二宮哲三	独逸語	
明治34年	教授	陸軍歩兵少尉	早崎勸	機械学、発動学、工場用具論、工場実習	実験工場主任
	助教授	陸軍工兵少尉	嶋野四平	体操、生徒課主任	大学予科体操科主任心得
	助教授	陸軍歩兵少尉	横田五郎	教務課主任心得	兼書記
	講師	陸軍歩兵少尉	田副正人	体操、生徒課詰	
	教授	陸軍歩兵少尉	二宮哲三	独逸語	
明治35年	教授	陸軍歩兵少尉	早崎勸	機械学、発動学、工場用具論、工場実習	実験工場主任
	助教授	陸軍工兵少尉	嶋野四平	体操、生徒課主任	大学予科体操科主任心得
	助教授	陸軍歩兵少尉	横田五郎	大学予科教務課主任心得	兼書記
	助教授	陸軍歩兵少尉	田副正人	体操、生徒課詰	
	嘱託	陸軍歩兵少尉	田副正人	体操、生徒課詰	

明治36年	教授	陸軍歩兵少尉	二宮 哲三	独逸語	
	教授	陸軍歩兵少尉	早崎 勸	機械学、発動学、工場用具論、工場実習	実験工場主任
	助教授	陸軍工兵少尉	嶋野 四平	体操	大学予科体操科主任
	助教授	陸軍歩兵少尉	横田 五郎	大学予科教務課主任	兼書記
	嘱託	陸軍歩兵少尉	田副 正人	体操、大学予科生徒課詰	
明治37年	教授	陸軍歩兵中尉	二宮 哲三	戦役服役中	
	教授	陸軍歩兵中尉	早崎 勸	戦役服役中	
	助教授	陸軍歩兵少尉	横田 五郎	戦役服役中	兼書記
	嘱託	陸軍歩兵大尉	宇野 親時	戦役服役中	
明治38年	教授	陸軍歩兵大尉	二宮 哲三	独語	
	教授	陸軍歩兵中尉	早崎 勸	充員応召中	
	助教授	陸軍歩兵中尉	横田 五郎	充員応召中	兼書記
	嘱託	陸軍歩兵大尉	宇野 親時	充員応召中	
明治39年	教授	陸軍歩兵大尉	二宮 哲三	独語	
	嘱託講師	陸軍歩兵大尉	松江 初童	体操生徒課勤務	第十二学科主任心得
	嘱託講師	陸軍歩兵中尉	井場 直	体操生徒課勤務	
明治40年	助教授	陸軍歩兵中尉	井場 直	体操生徒課勤務	
	嘱託講師	陸軍歩兵大尉	松江 初童	体操	第十二学科主任心得
	嘱託講師	陸軍歩兵中尉	西 歆太	体操、生徒課勤務	
	雇員	陸軍歩兵少尉	古閑 新	図書教室助手	
明治41年	助教授	陸軍歩兵中尉	井場 直	体操生徒課勤務	
	嘱託講師	陸軍歩兵大佐	吉弘 鑑徳	体操	
	嘱託講師	陸軍歩兵中尉	濱田 哲	体操、生徒課勤務	
	嘱託講師	陸軍歩兵少尉	菊地 行蔵	独語、生徒課勤務	
明治42年	教授	陸軍歩兵中尉	西 歆太	体操、生徒課勤務	
	教授	陸軍歩兵少尉	菊地 行蔵	独語、生徒課勤務	
	助教授	陸軍歩兵中尉	井場 直	体操生徒課勤務	
	嘱託講師	陸軍歩兵大佐	吉弘 鑑徳	体操	
	嘱託講師	陸軍歩兵大尉	後藤 克己	体操生徒課勤務	
明治43年	嘱託講師	陸軍歩兵中尉	渡部 斧人	体操	
	教授	陸軍歩兵少尉	菊地 行蔵	独語、生徒課勤務	
	助教授	陸軍歩兵中尉	井場 直	体操生徒課勤務	
	嘱託講師	陸軍歩兵大佐	吉弘 鑑徳	体操生徒課勤務	
	嘱託講師	陸軍歩兵大尉	後藤 克己	体操生徒課勤務	
明治44年	嘱託講師	陸軍歩兵中尉	渡部 斧人	体操生徒課勤務	
	教授	陸軍歩兵少尉	菊地 行蔵	独語、生徒課勤務	
	助教授	陸軍歩兵中尉	井場 直	体操生徒課勤務	
	嘱託講師	陸軍歩兵大佐	吉弘 鑑徳	体操	
	嘱託講師	陸軍歩兵大尉	後藤 克己	体操生徒課勤務	
大正元年	嘱託講師	陸軍歩兵中尉	加藤 貞雄	体操生徒課勤務	
	教授	陸軍歩兵少尉	菊地 行蔵	独語、生徒課勤務	
	助教授	陸軍歩兵中尉	井場 直	体操	
	嘱託講師	陸軍歩兵大佐	吉弘 鑑徳	体操	
	嘱託講師	陸軍歩兵大尉	後藤 克己	体操生徒課勤務	
	嘱託講師	陸軍歩兵中尉	加藤 貞雄	体操生徒課勤務	
大正2年	嘱託講師	陸軍騎兵特務曹長	松下 一幸	体操生徒課勤務	
	書記	陸軍一等計手	山田 山	会計課勤務	
	教授	陸軍歩兵少尉	菊地 行蔵	独語、生徒課勤務	
	助教授	陸軍歩兵中尉	井場 直	体操	

大正2年	囑託講師	陸軍歩兵大尉	後藤 克己	体操生徒課勤務	
	囑託講師	陸軍歩兵中尉	加藤 貞雄	体操生徒課勤務	
	書記	陸軍一等計手	山田 山	会計課勤務	
大正3年	教授	陸軍歩兵少尉	菊地 行蔵	独語、生徒課勤務	
	囑託講師	陸軍歩兵大尉	後藤 克己	体操生徒課勤務	
	囑託講師	陸軍歩兵少佐	松尾 六郎	体操生徒課勤務	
大正4年	書記	陸軍一等計手	山田 山	会計課勤務	
	教授	陸軍歩兵少尉	菊地 行蔵	独語、生徒課勤務	
	囑託講師	陸軍歩兵大尉	後藤 克己	体操生徒課勤務	
	囑託講師	陸軍歩兵少佐	松尾 六郎	体操生徒課勤務	
	囑託講師	陸軍歩兵大尉	坂根 次郎	体操生徒課勤務	
	雇員	陸軍歩兵少尉	吉村 信次	図書教室助手	
大正5年	教授	陸軍歩兵少尉	菊地 行蔵	独語、生徒課勤務	
	囑託講師	陸軍歩兵大尉	後藤 克己	体操生徒課勤務	
	囑託講師	陸軍歩兵少佐	松尾 六郎	体操生徒課勤務	
	囑託講師	陸軍歩兵大尉	坂根 次郎	体操生徒課勤務	
	書記		山田 山	会計課勤務	
	雇員	陸軍歩兵少尉	吉村 信次	図書教室助手	
大正6年	教授	陸軍歩兵少尉	菊地 行蔵	独語、生徒課勤務	
	囑託講師	陸軍歩兵大尉	後藤 克己	体操生徒課勤務	
	囑託講師	陸軍歩兵少佐	松尾 六郎	体操生徒課勤務	
	囑託講師	陸軍歩兵大尉	坂根 次郎	体操生徒課勤務	
	書記		山田 山	会計課勤務	
大正7年	教授	陸軍歩兵少尉	菊地 行蔵	独語、生徒課勤務	
	教授	陸軍砲兵少尉	伊藤 達夫	独語	
	囑託講師	陸軍歩兵少佐	松尾 六郎	体操生徒課勤務	
	囑託講師	陸軍歩兵大尉	坂根 次郎	体操生徒課勤務	
	囑託講師	陸軍歩兵大尉	江口 又男	体操生徒課勤務	
	書記		山田 山	会計課勤務	
大正8年	教授	陸軍歩兵少尉	菊地 行蔵	独語、生徒課勤務	
	教授	陸軍砲兵少尉	伊藤 達夫	独語	
	囑託講師	陸軍歩兵少佐	松尾 六郎	体操生徒課勤務	
	囑託講師	陸軍歩兵大尉	坂根 次郎	体操生徒課勤務	
	囑託講師	陸軍歩兵大尉	江口 又男	体操生徒課勤務	
	書記		山田 山	会計課勤務	
大正9年	教授	陸軍砲兵少尉	伊藤 達夫	独語	
	囑託講師	陸軍歩兵少佐	松尾 六郎	体操生徒課勤務	
	囑託講師	陸軍歩兵大尉	坂根 次郎	体操生徒課勤務	
	囑託講師	陸軍歩兵大尉	江口 又男	体操生徒課勤務	
	囑託講師	陸軍歩兵大尉	古屋 松雄	体操生徒課勤務	
	書記		山田 山	会計課勤務	
大正10年	囑託講師	陸軍歩兵少佐	松尾 六郎	体操生徒課勤務	
	囑託講師	陸軍歩兵大尉	坂根 次郎	体操生徒課勤務	
	囑託講師	陸軍歩兵大尉	江口 又男	体操生徒課勤務	
	囑託講師	陸軍歩兵大尉	古屋 松雄	体操生徒課勤務	
	書記		山田 山	会計課勤務	
大正11年	教授	陸軍歩兵少尉	西川 五郎	歴史	評議員、生徒監督寮監督
	教授	陸軍歩兵軍曹	小川 義章	修身、哲学概説	
	囑託講師	陸軍歩兵少佐	松尾 六郎	体操生徒課勤務	
	囑託講師	陸軍歩兵大尉	江口 又男	体操生徒課勤務	

大正11年	嘱託講師	陸軍歩兵大尉	古屋 松雄	体操生徒課勤務	
	嘱託講師	陸軍歩兵軍曹	田代 眞	図画	
大正12年	教授	陸軍歩兵少尉	西川 五郎	歴史	
	教授	陸軍歩兵少尉	小川 義章	哲学概説	
	教授	陸軍歩兵少尉	上田 良吉	英語	
	嘱託講師	陸軍歩兵少佐	松尾 六郎	体操	生徒課勤務
	嘱託講師	陸軍歩兵少尉	江口 又男	体操	生徒課勤務
	嘱託講師	陸軍歩兵少尉	古屋 松雄	体操	生徒課勤務
	嘱託講師	陸軍歩兵軍曹	田代 眞	図画	
大正13年	教授	陸軍歩兵少尉	小川 義章	哲学概説	
	教授	陸軍歩兵少尉	上田 良吉	英語	
	嘱託講師	陸軍歩兵大尉	古屋 松雄	体操	生徒課勤務
	嘱託講師	陸軍歩兵軍曹	田代 眞	図画	
	嘱託講師	陸軍歩兵特務曹長	西村 又平	体操科	
大正14年	教授	陸軍歩兵少尉	小川 義章	哲学概説	
	教授	陸軍歩兵少尉	上田 良吉	英語	
	配属将校	陸軍歩兵中佐	本山 友吉		
	嘱託講師	陸軍歩兵大尉	古屋 松雄	体操	生徒課勤務
	嘱託講師	陸軍歩兵軍曹	田代 眞	図画	
	嘱託講師	陸軍歩兵特務曹長	西村 又平	体操科	
	嘱託講師	陸軍歩兵特務曹長	上堂園三之助	体操科	
	嘱託講師	陸軍歩兵中佐	永田 多門	体操科	
	大正15年	教授	陸軍歩兵少尉	小川 義章	哲学概説
教授		陸軍歩兵少尉	上田 良吉	英語	
配属将校		陸軍歩兵中佐	本山 友吉		
嘱託講師		陸軍歩兵大尉	古屋 松雄	体操	生徒課勤務
嘱託講師		陸軍歩兵軍曹	田代 眞	図画	
嘱託講師		陸軍歩兵特務曹長	上堂園三之助	体操科	
嘱託講師		陸軍歩兵中佐	永田 多門	体操科	
嘱託講師		陸軍歩兵特務曹長	峯 繁	体操科	
昭和2年	教授	陸軍歩兵少尉	小川 義章	哲学概説	
	教授	陸軍歩兵少尉	上田 良吉	英語	
	配属将校	陸軍歩兵中佐	本山 友吉		
	助教授	陸軍三等薬剤官	山崎 理	化学実験	
	嘱託講師	陸軍歩兵少尉	田代 眞	図画	
	嘱託講師	陸軍歩兵特務曹長	上堂園三之助	体操科	
	嘱託講師	陸軍歩兵中佐	永田 多門	体操科	
	嘱託講師	陸軍歩兵特務曹長	峯 繁	体操科	
	嘱託講師	陸軍歩兵少尉	青木 幸治	植物及び動物	
	嘱託講師	陸軍歩兵大尉	森 豊彦	体操科	
昭和3年	教授	陸軍歩兵少尉	小川 義章	哲学概説	
	教授	陸軍歩兵少尉	上田 良吉	英語	
	配属将校	陸軍歩兵中佐	笠 繁善		
	助教授	陸軍三等薬剤官	山崎 理	化学実験	
	嘱託講師	陸軍歩兵少尉	田代 眞	図画	
	嘱託講師	陸軍歩兵特務曹長	上堂園三之助	体操科	
	嘱託講師	陸軍歩兵中佐	永田 多門	体操科	
	嘱託講師	陸軍歩兵特務曹長	峯 繁	体操科	
	嘱託講師	陸軍歩兵大尉	森 豊彦	体操科	
昭和4年	教授	陸軍歩兵少尉	上田 良吉	英語	
	配属将校	陸軍歩兵中佐	笠 繁善		

昭和4年	助教授	陸軍三等薬剤官	山崎 理	化学実験	
	嘱託講師	陸軍歩兵少尉	田代 眞	図画	
	嘱託講師	陸軍歩兵特務曹長	上堂園三之助	体操科	
	嘱託講師	陸軍歩兵中佐	永田 多門	体操科	
	嘱託講師	陸軍歩兵特務曹長	峯 繁	体操科	
	嘱託講師	陸軍歩兵大尉	森 豊彦	体操科	
昭和5年	教授	陸軍歩兵少尉	上田 良吉	英語	
	配属将校	陸軍歩兵中佐	笠 繁善		
	助教授	陸軍三等薬剤官	山崎 理	化学実験	
	嘱託講師	陸軍歩兵少尉	田代 眞	図画	
	嘱託講師	陸軍歩兵特務曹長	上堂園三之助	体操科	
	嘱託講師	陸軍歩兵中佐	永田 多門	体操科	
	嘱託講師	陸軍歩兵特務曹長	峯 繁	体操科	
昭和6年	教授	陸軍歩兵少尉	上田 良吉	英語	
	配属将校	陸軍歩兵中佐	三谷與八郎		
	助教授	陸軍三等薬剤官	山崎 理	化学実験	
	嘱託講師	陸軍歩兵少尉	田代 眞	図画	
	嘱託講師	陸軍歩兵特務曹長	上堂園三之助	体操科	
	嘱託講師	陸軍歩兵中佐	永田 多門	体操科	
	嘱託講師	陸軍歩兵特務曹長	峯 繁	体操科	
	嘱託講師	陸軍歩兵大尉	森 豊彦	体操科	
	嘱託講師	陸軍歩兵特務曹長	内藤 一吉	体操科	
	昭和7年	教授	陸軍歩兵少尉	上田 良吉	英語
配属将校		陸軍歩兵中佐	三谷與八郎		
配属将校		陸軍歩兵少佐	緒方 敬志		
助教授		陸軍三等薬剤官	山崎 理	化学実験	
助教授		陸軍騎兵少尉	橋本 順治	体操科	
嘱託講師		陸軍歩兵少尉	田代 眞	図画	
嘱託講師		陸軍歩兵中佐	永田 多門	体操科	
嘱託講師		陸軍歩兵特務曹長	峯 繁	体操科	
嘱託講師		陸軍歩兵大尉	森 豊彦	体操科	
嘱託講師		陸軍歩兵特務曹長	内藤 一吉	体操科	
昭和8年	教授	陸軍歩兵少尉	上田 良吉	英語	
	配属将校	陸軍歩兵中佐	三谷與八郎		
	配属将校	陸軍歩兵少佐	緒方 敬志		
	助教授	陸軍三等薬剤官	山崎 理	化学実験	
	助教授	陸軍騎兵少尉	橋本 順治	体操科	
	嘱託講師	陸軍歩兵少尉	田代 眞	図画	
	嘱託講師	陸軍歩兵中佐	永田 多門	体操科	
	嘱託講師	陸軍歩兵特務曹長	峯 繁	体操科	
	嘱託講師	陸軍歩兵大尉	森 豊彦	体操科	
	嘱託講師	陸軍歩兵特務曹長	内藤 一吉	体操科	
昭和9年	教授	陸軍歩兵少尉	上田 良吉	英語	
	配属将校	陸軍歩兵中佐	伊東 武夫		
	配属将校	陸軍歩兵少佐	十時 和彦		
	助教授	陸軍三等薬剤官	山崎 理	化学実験	
	助教授	陸軍歩兵少尉	吉田 三二	体操科	
	嘱託講師	陸軍歩兵少尉	田代 眞	図画	
	嘱託講師	陸軍歩兵中佐	永田 多門	体操科	
	嘱託講師	陸軍歩兵特務曹長	峯 繁	体操科	
	嘱託講師	陸軍歩兵特務曹長	峯 繁	体操科	

昭和9年	嘱託講師	陸軍歩兵大尉	森 豊彦	体操科	
	嘱託講師	陸軍歩兵特務曹長	内藤 一吉	体操科	
昭和10年	教授	陸軍歩兵少尉	上田 良吉	英語	
	教授	陸軍砲兵少尉	相原要之進	数学	
	配属将校	陸軍歩兵中佐	伊東 武夫		
	助教授	陸軍三等薬剤官	山崎 理	化学実験	
	助教授	陸軍歩兵少尉	吉田 三二	体操科	
	嘱託講師	陸軍歩兵少尉	田代 眞	図画	
	嘱託講師	陸軍歩兵中佐	永田 多門	体操科	
	嘱託講師	陸軍歩兵特務曹長	峯 繁	体操科	
	嘱託講師	陸軍歩兵大尉	森 豊彦	体操科	
	嘱託講師	陸軍歩兵特務曹長	内藤 一吉	体操科	
昭和11年	教授	陸軍歩兵少尉	上田 良吉	英語	
	教授	陸軍砲兵少尉	相原要之進	数学	
	教授	陸軍砲兵少尉	日下部 智	物理実験	
	教授	陸軍工兵少尉	稲葉 三男	数学	
	配属将校	陸軍歩兵中佐	大村 敏雄		
	助教授	陸軍三等薬剤官	山崎 理	化学実験	
	助教授	陸軍歩兵少尉	吉田 三二	体操科	
	嘱託講師	陸軍歩兵少尉	田代 眞	図画	
	嘱託講師	陸軍歩兵中佐	永田 多門	体操科	
	嘱託講師	陸軍歩兵特務曹長	峯 繁	体操科	
昭和12年	嘱託講師	陸軍歩兵大尉	森 豊彦	体操科	
	教授	陸軍歩兵少尉	上田 良吉	英語	
	教授	陸軍砲兵少尉	相原要之進	数学	
	教授	陸軍砲兵少尉	日下部 智	物理実験	
	教授	陸軍工兵少尉	稲葉 三男	数学	
	配属将校	陸軍歩兵中佐	大村 敏雄		
	配属将校代理	陸軍歩兵大佐	堀江 長蔵		
	助教授	陸軍三等薬剤官	山崎 理	化学実験	
	助教授	陸軍歩兵少尉	吉田 三二	体操科	
	嘱託講師	陸軍歩兵少尉	田代 眞	図画	
昭和13年	嘱託講師	陸軍歩兵中佐	永田 多門	体操科	
	嘱託講師	陸軍歩兵准尉	峯 繁	体操科	
	嘱託講師	陸軍歩兵大尉	森 豊彦	体操科	
	嘱託講師	陸軍歩兵准尉	内藤 一吉	体操科	
	教授	陸軍歩兵少尉	上田 良吉	英語	
	教授	陸軍砲兵少尉	相原要之進	数学	
	教授	陸軍砲兵少尉	日下部 智	物理実験	
	教授	陸軍工兵少尉	稲葉 三男	数学	
	配属将校	陸軍歩兵大佐	深草 厚之		
	助教授	陸軍三等薬剤官	山崎 理	化学実験	
昭和14年	助教授	陸軍歩兵少尉	吉田 三二	体操科	
	嘱託講師	陸軍歩兵少尉	田代 眞	図画	
	嘱託講師	陸軍歩兵中佐	永田 多門	体操科	
	嘱託講師	陸軍歩兵准尉	峯 繁	体操科	
	嘱託講師	陸軍歩兵准尉	内藤 一吉	体操科	
	嘱託講師	陸軍歩兵少尉	小田 又雄	体操科	
	教授	陸軍砲兵少尉	相原要之進	数学	
	教授	陸軍砲兵少尉	日下部 智	物理実験	
	教授	陸軍工兵少尉	稲葉 三男	数学	

昭和14年	配属将校	陸軍歩兵大佐	深草 厚之		
	助教授	陸軍三等薬剤官	山崎 理	化学実験	
	助教授	陸軍歩兵少尉	吉田 三二	体操科	
	嘱託講師	陸軍歩兵少尉	田代 眞	図画	
	嘱託講師	陸軍歩兵少尉	内藤 一吉	体操科	
	嘱託講師	陸軍歩兵少尉	小田 又雄	体操科	
	嘱託講師	陸軍歩兵少佐	龍造寺芳信	体操科	
	嘱託講師	陸軍歩兵中佐	古閑 松太	体操科	
昭和15年	教授	陸軍少尉	相原要之進	数学	
	教授	陸軍中尉	稲葉 三男	数学	
	配属将校	陸軍大佐	深草 厚之		
	助教授	陸軍少尉	山崎 理	化学実験	
	助教授	陸軍中尉	吉田 三二	体操	
	嘱託講師	陸軍歩兵少尉	田代 眞	図画	
	嘱託講師	陸軍歩兵中尉	内藤 一吉	体操	
	嘱託講師	陸軍歩兵中尉	小田 又雄	体操	
	嘱託講師	陸軍歩兵少佐	龍造寺芳信	体操	
昭和16年	嘱託講師	陸軍歩兵中佐	古閑 松太	体操	
	教授		相原要之進	数学	
	教授		稲葉 三男	数学	
	配属将校		深草 厚之		
	助教授		山崎 理	化学実験	
	助教授		吉田 三二	体操	
	嘱託講師		田代 眞	図画	
	嘱託講師		内藤 一吉	体操	
	嘱託講師		小田 又雄	体操	
	嘱託講師		鹿江 二夫	体操	
昭和17年	嘱託講師		廣田 繁明	体操	
	嘱託講師		高木 眞蔵	体操	
	教授		相原要之進	数学	
	教授		稲葉 三男	数学	
	配属将校		深草 厚之		
	助教授		山崎 理	理化演習	
	助教授		吉田 三二	体鍊	
	助教授		鹿江 二夫	体鍊	
	嘱託講師		内藤 一吉	体鍊	体鍊科主任
昭和18年	嘱託講師		小田 又雄	体鍊	
	嘱託講師		廣田 繁明	体鍊	
	教授		相原要之進	数学	
	教授		稲葉 三男	数学	
	配属将校		江口庸太郎		
	助教授		山崎 理	理化演習	
	助教授		吉田 三二	体鍊	体鍊部主任
	助教授		鹿江 二夫	体鍊	
	嘱託講師		小田 又雄	教練	
嘱託講師		廣田 繁明	教練		

【第五高等学校一覧】 明治20年～昭和18年より作成



(四) 配属将校一覧

年 度	軍 肩 書	氏 名	出 身	配属時年齢
大正14年	陸軍歩兵中佐	本山 友吉	佐賀	46
大正15年	陸軍歩兵中佐	本山 友吉	佐賀	47
昭和2年	陸軍歩兵中佐	本山 友吉	佐賀	48
昭和3年	陸軍歩兵中佐	笠 繁善	熊本	45
昭和4年	陸軍歩兵中佐	笠 繁善	熊本	46
昭和5年	陸軍歩兵中佐	笠 繁善	熊本	47
昭和6年	陸軍歩兵中佐	三谷與八郎	香川	45力
昭和7年	陸軍歩兵中佐	三谷與八郎	香川	46力
昭和8年	陸軍歩兵少佐	緒方 敬志	熊本	47力
昭和9年	陸軍歩兵中佐	緒方 敬志	熊本	
昭和10年	陸軍歩兵少佐	伊東 武夫	福岡	45
昭和11年	陸軍歩兵中佐	伊東 武夫	福岡	46
昭和12年	陸軍歩兵中佐	十時 和彦	熊本	43
昭和13年	陸軍歩兵大佐	堀江 長蔵	福岡	48
昭和14年	陸軍歩兵大佐	大村 敏雄	福岡	47
昭和15年	陸軍歩兵大佐	大村 敏雄	福岡	46
昭和16年	陸軍大佐	厚之	熊本	50力
昭和17年	陸軍大佐	厚之	熊本	55
昭和18年	陸軍大佐	厚之	熊本	56
昭和19年	陸軍大佐	厚之	熊本	57
昭和19年	陸軍中佐	江口庸太郎	熊本	58
昭和19年	陸軍大佐	杉本 一雄		59
昭和19年	陸軍大佐	杉本 一雄		60

※『第五高等学校一覽』大正14年、昭和18年、『職員進退』昭和18・19年より作成。

※三谷與八郎、堀江長蔵については、『陸海軍人名事典』より引用。

## 七、考察

第五高等学校は、中学校令に基き全国に五か所設置された高等中学校の一つとして、明治二〇（一八八七）年熊本に創設された。明治二七（一八九四）年高等学校令により第五高等学校となった。

戦前の高等学校は男子を対象とした高等教育機関である。帝国大学進学のための基礎教育を行うという役割を担い、基礎教育に重きを置きつつ、人間形成を根幹とする少数精鋭教育が行われた。

時期による変化はあったが、入学後最低一年は寮で生活するのが原則とされ、二年生、三年生は一部が惣代や炊事委員・運動委員・図書委員・衛生委員などの役員として残寮した。運営は生徒が行い、時には寮を監督する生徒課と衝突することもあった。この自治の伝統のもと、生徒たちは生活を共にすることによって互いに切磋琢磨し、友情を深めた。部活動やクラス活動など学校生活を統轄したのは、校友会「龍南会」である。龍南会総務部には生徒があたり、会費の集金や予算の振り分け、決算、各部間の調整などを行った。生徒の中にはこういった役割の為に就学年限以上に学校にとどまるものもあり、それは「誇り」とされた。

この五高生活に影を落としたのは、昭和六（一九三一）年の柳条湖事件にはじまる戦争であった。昭和一二（一九三七）年国民精神総動員実施要項が閣議決定され、翌年には国家総動員法が公布された。これにより全国的に国民精神総動員運動が展開されることになる。教育

界でも戦時体制への切り替えが強調され、大学の軍事教練の必修化、青年学校の義務制などが打ち出されていく。このような中、高等学校では、長髪・飲酒・運動会・記念祭等が規制・禁止された。五高では昭和一四年断髪令が言い渡され、昭和一五（一九四〇）年一月二二日に校友会「龍南会」が「龍南学徒報国団」と改組され、五高の寮である習学寮とともに学校の直接監督下に置かれた。昭和一七年には国民勤労報国令施行規則に基づく学徒出動命令が出され、学徒の勤労動員が開始された。太平洋戦争の戦況が逼迫する昭和一七（一九四二）年には修業年限が二年半に、さらに昭和一八年入学の学年は二年に短縮された。昭和一八年一〇月には法文系学生の学徒出陣が行われ、五高からも昭和二〇年七月までに二三人が出陣した。

本報告書では、この第五高等学校と軍隊との関わりに視点を置き、戦時期の第五高等学校について考察する。その際の方法として、高等学校と軍隊とのかかわりを二つの面から捉えることとする。一つは学校内の軍事肩書所持教員について、もう一つは軍隊との関わりである。軍事肩書所持教員については、これらの教員が果たした役割、その他の教員、生徒との関係に着目する。一方、軍隊とのかかわりについては、主に昭和一八年の査閲事件を中心として、軍事教練・査閲について考察する。

### （一） 軍肩書所持教員について

明治一九年、師範学校令、小学校令、中学校令が公布されると、体

操が必修となり、兵式体操が取り入れられた。五高でも本科と予科一級、二級は兵式体操、予科三級は普通体操が必修となった(注二)。この時採用された兵式体操は森有礼文相の教育政策の中で強力に推進されたものである。森は体操科の指導者として現役将校をその任にあててを要求していたが、当時の陸軍側には体制整備が充分なされておらず、要求に答えるだけの余裕がなかった。そのため退役下士官がその指導に当たることになった(注二)。

五高でも軍肩書所持教員一覧に見られるように、開校当初は退役の陸軍大尉が担当した。明治二一―昭和一八年の軍事肩書所持教員のべ三五〇人のうち、体操科の担当は一八一人にのぼる。彼らの多くは体操科と共に生徒課も担当していた。校務分掌規程によると、校務は教授部と事務部に分けられ、事務部には教務課・生徒課・庶務課・会計課・図書課が置かれ事務を分掌した。昭和一七年までの生徒課の職務分掌は次の通りである。

- 一、生徒の取締に関する事
- 二、生徒の訓戒及び懲戒に関する事
- 三、生徒の欠席、欠課、遅刻に関する事
- 四、生徒の休学、退学、除名に関する事
- 五、生徒の学籍に関する事
- 六、在学証明、品行証明及兵役に関する事
- 七、組長に関する事
- 八、生徒の通学及宿所に関する事

九、生徒の衛生及身体検査に関する事

十、生徒の集会に関する事

十一、生徒の掲示に関する事

十二、生徒の入寮、退寮に関する事

十三、習学寮の警備及び衛生に関する事

十四、習学寮の炊事監督に関する事

十五、其の他生徒訓育及習学寮に関する事

査閲事件の昭和一八年になると、校務分掌の組み換えが行われ、生徒課は修練部に属し、分掌事項が二二に増加した。増加した事項は、修練部の事務、生徒課の文書等に関する事、報国団との連絡、日本文化講義に関する事、生徒集会所の管理、学寮宿直に関する事など時局に対応したものになっている。学寮宿直は座談会でも話題に上がっていたものである。そのときの話によると、宿直には軍肩書きを所持する教員が主に当たっていたようであるが、昭和一八年に生徒課を担当していたのは軍肩書のない教授であった。

以上により、軍の肩書を所持した教員は、兵式体操、教練の指導と共に、生徒課として生徒を監視する役割を担っていたことがわかる。

大正一四年、陸軍現役将校学校配属令が制定され、官公立の師範学校、中学校、高等学校、専門学校等の男生徒は配属された陸軍現役将校の直接の指導のもとに学校教練を修めることになった。この実施にあたり、軍首脳は配属将校が兵営内の慣行をそのまま学校へ持ち込み、学生・生徒との無用の摩擦を起こしはしないかという点を心配した。

そのため、配属直前の三月に、約二二〇〇人の予定者を東京に集め、オリエンテーションが開催されている。ここでも「生徒の言動に対し一々神経を尖らし、頭からどなり付けけるようなことがあってはならない」とか、だらしなく見える服装も「経済の問題がとれない家庭の事情もある」ので「校長とも相談の上でなければ」口出しをするなどかという注意も与えられた(注三)。初期の配属将校たちは、「陸軍省の慎重な選考もあって、人格温厚な部人で其の指導も適切、生徒職員間にもよく親しまれた人が多かった」という評価がある(注四)。

他の高等学校史をひもといてみると、これを裏付けるような事実が認められる。『第二高等学校史』(第二高等学校尚志同窓会 一九七九年)には配属将校、教練について次のような記述がある。

「二高においても歴代の配属将校はおおむね篤実でまた柔軟性のある人柄の将校が多く、生徒との間に徒な摩擦はなく過ごされてきた。

しかも、戦時下の厳しい状況に入るまでは、少なくとも昭和一〇年前後までは軍事教練を受ける態度もずい分ルーズなものがあつた。」

また、松江高等学校では、「善人ぞろいの教官」の中に配属将校が挙げられており、「狂つたようなファシズムから生徒たちを守つた」とある(注五)。

五高では生徒との関係はどうだったのだろうか。アンケート調査の結果により考察すると、生徒との関係はおおむね良好で、「友人みたいい」「極めて紳士的」「温厚篤実」と好印象をもたれていた。しかしそれは、「軍人も五高生に一目置いていのかと思う程であつた」「大

事に扱つてくれた」「いづれも大人しい」とあるように、軍人側からも五高生に気を使つていたためであるかもしれない。結局、「軍人というより仲間意識が強く教官もおしつけがましくなかつた。どんな教官も生徒のほうに同化されてしまつていたようです。」というように、生徒の動向を監視していたというよりも、五高に順応し、寛大に生徒の行動を見守つていたようである。

アンケートの当事者の時代は配属将校令が出されてから二〇年近く経た後のことであるが、アンケートの結果からは、当初配属将校制度の定着に配慮した方針による配属将校の選定基準がそのまま続いてきた可能性が認められる。

## (二) 査閲事件

昭和一八年の査閲事件については、『統習学寮史』一七三頁に次のように記述されている。

「偶々山口陸軍少将なる熊本師団兵務部長が来校して一場の講演をなしたが、その態度は恰も軍部から高等学校を説教する如き態度で、かねがね軍人に反感を持つていた五高生には甚だ傲慢に見えた。曰く。「或高校生は『従来は立身出世を目標にして自分が自分は決してそんな事を考へぬ、すぐ軍隊に入つて戦場にゆく』と云つた。お前達も大臣にならうなんて野心は抱くな。」と、そこで満場の一同噴笑したので彼は激怒して叱咤する等の乱態を呈した。その云ふ所は確かに一面、時の高校生の難点を正しく衝いてはいた。所謂軟派五高

生の増加は五高をして他の専門学校と異る所なからしめ、自己に不誠実な、内面的反省の不足しつゝある状況である。その十日後同少将は教練巡察官として再来し、散々に悪評を下して後、昼食をしに寮に入つて来た。校長に誘導されて傲然と入つて来たので、彼らを無視して汁をつがせる、彼は敬礼をうけるものと思つて立っていたが、不服そうな顔をして洪々座る。そこでやをら寮生誓詞を最初の『夫れ我が寮は』と云ふ所から唱へ（註、日常は綱領三条丈しか唱へぬ）特に「国運の隆替」「報国の誠」等の所に力を入れる。寮生の綱領も亦物凄く元氣がある。食堂も破裂せんばかりである。査閲官は遂に一言をも発せずして引き退る。痛快であつた。

—惣代日誌 岩村惣代—

この日誌には、査閲についての具体的な記述がない。そこで、今回の調査に基づき、査閲事件について検証してみることにする。なお、この事件当時の在学生は、おおむねであるが、三年生が昭和一八年卒業生、二年生が昭和一九年卒業生、一年生が昭和二〇年卒業生である。アンケート・聞き取りの内容から認められる事実の認定の差異は、まとめると次のようになる。

#### 1、査閲の場所

武夫原（五高の運動場）、渡鹿練兵場、帯山練兵場

#### 2、トラブルを起こした当事者

文科二年甲二組、文科三年乙組、理甲一組

#### 3、トラブルの内容

査閲官が未知の行動を要求し、「教わっていない」と答えたため、配属将校を罵倒した。

練兵場へ行く途中規程と違う道を通り、時間に間に合わなかった。練兵場で一人の生徒が教練中に座り込み、論語を説いた。

等

#### 4、査閲の評価

不可、やり直し。おおむね可。

#### 5、講評の有無

査閲の最中に中止のため講評なし。査閲後に講評。

以上のように、査閲当日について情報を一つにまとめるには、あまりにも差異が大きく、理解に苦しむところがある。何故差異が生じたのかについては、次の二つの理由が考えられる。一つはクラスごとに査閲が行われ、内容がそれぞれ違っていたため、査閲の記憶が全く異なつたものになっていること。一つは査閲の評価が直接関係あるのは三年生であつたため、二年生・一年生とは違った動きをしていたかもしれないことである。また、査閲と練兵場での閲兵など数日の記憶が複合している可能性も考えられる。以上の推測を踏まえて、概略を述べることにする。

「昭和一七年、五高の寮生が恒例の阿蘇登山を行った際、道の途中で観光バスを取り囲みストームを始めた。興じた数名がバスの屋根に上り、バスを破損させてしまった。戦時体制の締め付けが激しくなつて

いた時期である。阿蘇登山等の寮行事に生徒課の干渉が入り始めていた。そのため、寮惣代がバス会社との交渉によって穏便に済ませたはずだったが、この時バスの後ろにいた公用車に熊本師団の軍人が乗っていた。この軍人から学校に抗議が入り、寮惣代の辞職願にまでことは発展した。この軍人が山口少将であった。

昭和一八年、前触れなしに山口少将が五高を訪れ、講演会を開催する旨を伝えた。配属将校深草大佐が対応したが、この時は講演を断った。その後改めて、山口少将の講演が開かれ、全生徒が出席した。しかし最初に五高生を非難したため、生徒が哄笑し、二階にいた三年生が下駄を鳴らして妨害したため、山口少将は講演を途中で中止して退席した。

この年の査閲官は山口少将であった。武夫原において全体の分列行進の後、クラスごとの査閲が行われた。三年生は武夫原での査閲後、練兵場へ行軍し、次に二年生以下が査閲を受けた。文科二年甲二組の査閲中、査閲官が生徒の未知の行動を指示した。「教わっていない」という返答を受けて、配属将校を罵倒した。一方、三年生の一部は練兵場へ移動途中予定の通路を通らず、査閲に遅れることとなる。練兵場では武夫原の出来事で腹を立てている深草大佐が査閲官の到着を待たずに文科三年乙組の教練を始めた。この時一人の生徒が動作をやめ、論語を説いた。このため査閲官は怒り査閲を中止した。講評は最低でこの日の教練は不可となった。査閲のあと山口少将は昼食をとるため寮の食堂を訪れたが、生徒たちが敬礼を行わず寮生誓詞を高唱した

ため退室した。さらに山口少将の宿舍まで押しかけて抗議をした生徒もあり、教職員は生徒の静止に努めた。しかし、校長をはじめ教職員は、生徒に対して、この日の査閲についての非難は一切行わなかった。」以上推測される概略をまとめてみた。一読された卒業生のご批判を乞うところである。

この事件について生徒の意識をみると、「三年生はさすがに偉いと快哉を叫んだ」「抗議集会を開いた」「何か、叱られた？位である」「これは大変なことになったかなと思った」「事件となっていないと思う」と様々である。しかし、無記入や記憶なしも多く、学校全体の問題とはなっていないようである。また、「右翼の生徒も多かったが、同じ反応」という回答もあるように、生徒の中には反軍というよりも、山口少将という五高の自治に介入してくるわからずやを懲らしてやろうという意識のほうが強かった。但し、その後警察からマークされたり、教練不合格のため幹部候補生の試験が受けられなかった等深刻な影響を受けたものも一部いたことも事実であった。

一方、教職員は、添野校長配属将校深草大佐をはじめ、生徒を擁護する側に回り、他の誰も生徒の行為を批判しなかった。但し、『五高七〇年史』一二七頁には、「然り、寮生は痛快であったらうが、『五高卒業生は、今後、特幹の試験にはパスさせまい。』と放言したとかで、学校長の心痛、配属将校の苦慮は、並大抵ではなく、殊に、添野校長の如きは筆者に対して、『自分はどんな構はないけれども、累を卒業生に及ぼすことになる、とても耐へられない。何とかして、この

度の不名誉を恢復しなければならぬ。」と、固く期する所があったやうだ。」という記述があり、教員側の苦慮がしのばれる。この時の添野校長の対応には今でも尊敬を寄せる卒業生が多い。

同様の事件は他の高等学校にもあったらしく、先述の『第二高等学校校史』には、次のように記されている。

「二高の軍事教練強化のため派遣された将校が、二高生の脱帽敬礼の風儀をとり上げ咎め、軍隊式の挙手の礼を要求したところ、萩庭教授が敢然と『脱帽の敬礼は日本古来の敬礼』なることを弁じ、将校はついに沈黙した等のエピソードも伝えられており、さすがに戦時下となつては、自由奔放の二高の気風も折々、軍の指導とフリクションを生じたものである。強制に対しては素直に従うことをあえてしない二高生も、自主的にやるとなると、軍事教練でもなんでもおおいに積極的にやつてのけてそのエネルギーと意気を示した。」

また、アンケートの中に七高においても五高と同様の事件が起こつてゐるとの指摘もあった。学校へ介入してくるものへの反感は高等学校に共通のものであったのかもしれない。また、アンケートで五高の軍隊との関わりと問うたところ、約七五%が「ない」一五%が「ある」と答えた。「ある」と答えた人たちは、馬術部や通信部など部活動の環境で交流したということのようである。

昭和一九年に入ると、学徒動員などにより授業時間が少なくなつていった。しかし、教員は相変わらずの背広姿で教室に現れ、教室で軍国主義的な話をする人もなかった(注5)。という証言もあり、授業内

容はそれほど影響を受けていないように思える。

また、五高内では教授の示唆や、朝鮮半島出身者、親戚の軍関係者などから戦況は伝わり、戦争の話もできたようである。多くは自分たちの生死の問題としてとらえていたことは想像に難くない。また、国を守るという使命感と、五高生の軍事教練への態度のギャップに悩むものもいた。

査閲事件の当事者であった添野校長と深草大佐のその後については、川島史郎氏(昭和一九年理甲卒)の九龍会だより(昭和一九年入学生会同窓会報)への投稿と小樽商科大学同窓会誌の記録があるので掲載する。「添野先生は一九年秋五高を退職後満州吉林市に新設された師導大学に単身赴任、二〇年正月数日だけ慌しく家族の顔を見に熊本にお帰りになった。これが先生のお元気な姿が見られた最後の機会だった由である。ご家族は花陵会館の離れに仮住居の後、市内清水町へ移り住まれた。終戦後の満州の混乱の中で、添野先生は栄養失調から結核を発病、急速に悪化し、二一年九月極めて重篤な状態で福岡に帰国上陸され、間もなく熊本でお亡くなりになった。

(中略)私は添野先生が満州に赴任されたのは一八年の査閲の責任をお取りになった、乃至は左遷されなさつたのだという噂を耳にしていたと思う。今回おたずねした所、『そのようなことは聞いていない』と和田夫人(添野先生長女ミチさん)はハッキリ否定された。先生のその後の職場が内地ではなく満州であったことにあの査閲の影響がなかったとは云い切れないが、先生は明治一三年のお生まれ

であって、年を数えてみると昭和十九年が定年の年にあたっていたのではないかと推測される。あの年満州に行くというところがどのような危険を意味するか、先生にはもとより充分ご承知だったのである。かつまた、ご自身に老いが迫っていることも自覚して居られたに違いない。それにも拘らず、死地に赴くに等しい吉林への赴任を決意されたのは、先生が若い扶養家族を抱えておられたからであろうと私には思えてならぬ。」

〔川島史郎「添野家との巡り合い」『九龍会だより』〕

〔深草〕先生は小生（昭和八年小樽商業学校卒業）等とほぼ同時にご在職、配属将校（陸軍中佐）として故菅大尉、斎藤少尉殿と共に軍事教練を担当されました。小生等が二年生の時（昭和六年）満州事変が起こり、祖国が軍国主義へそして敗戦へつながる道を辿り始めた当時の軍教の教官としては誠に軍人らしからぬ軍人の様なお風格で我々にとってはありがたかったようです。太ったお身体で雪中教練も適当にやって下さいました。（中略）小生ら卒業（昭和八年）後、間もなく退官されご郷里の熊本へ帰られました。（中略）戦時中は青少年の鍛錬に努力されておられたようです。六、七年前にお手造りの干柿のご恵送をうけ恐縮しました。二、三年前（昭和四〇年ころ）から目をわずらわれ、視力が不十分になられた由。去る五月二四日（昭和四三年）、ご家族からご逝去の電報に接し驚いた次第です。享年八十五才かと存ぜられます。（後略）

（鈴木三七「元陸軍中佐深草厚之先生を悼む」小樽商科大学同窓会

誌『緑丘』六三号 昭和四三年一〇月）

筆者は、戦時下軍国主義の時代、国の指導者を育成する高等教育機関の中で、軍隊に対してこのような意思表示が出来たことに驚きを禁じえなかった。たしかに、五高で起った昭和一八年の査閲事件は、反軍や反戦ではなく、そのときの査閲官に關しての反感という面が大きかった。しかし、当時大きな権力を持っていた軍隊に対してどのような形であれ、高等教育機関が抵抗できたことは特筆すべきと考える。「旧制高等学校と戦争」は旧制高等学校が日本の近代に果たした役割を検証するうえでも大きなテーマである。

今回実施した「戦前・戦後の第五高等学校に關する調査」の中には貴重な情報が多く含まれ、考察の対象となることは多い。今後調査結果を引き続き考察していきたいと思う。

〔注一〕「第五高等中学校一覽」明治二二～二三年

〔注二〕安藤忠「国民教育と軍隊―陸軍現役将校学校配属令について―」

一九八三年

〔注三〕秦郁彦「第二次大戦期の配属将校制度」『軍事史学』通刊一六〇号

二〇〇五年

〔注四〕平原春好「配属将校制度の研究」一九九三年

〔注五〕栗原真美「配属将校の「実態」」『キリスト教問題研究』五五号二〇

〇六年

〔注六〕中野孝次「戦時下の青春」『武夫原頭に草萌えて』一九九七年



第五高等学校における教練・査閲

「戦中・戦後の第五高等学校に関する調査」報告

発行日 二〇一〇年三月三十一日

編集・発行 熊本大学五高記念館 薄田千穂

〒八六〇―八五五五

熊本市黒髪二―四〇―一

☎〇九六―三四二―二〇五〇

印刷 ホープ印刷株式会社